



長崎県埋蔵文化財センター


日本遺産

長崎県埋蔵文化財センター開設 10 周年記念事業
令和元年度 東アジア国際シンポジウム

魏志倭人伝の中の

倭と韓

— 烏丸鮮卑東夷伝にみる東アジア交流 —

主催  長崎県埋蔵文化財センター

ごあいさつ

九州本土と朝鮮半島との間、玄界灘に浮かぶ壱岐島は、「魏志倭人伝」にも描かれているように古代から、朝鮮半島や中国との対外交流において重要な役割を果たしてきました。このような歴史的背景を踏まえ、長崎県埋蔵文化財センターでは、開設以来、東アジア世界との交流の歴史に焦点をあてた研究を進めています。その東アジア考古学研究の一環として、平成 27 年 5 月に友好機関協定を締結いたしました韓国・釜山博物館をはじめとする国内外の研究機関の御協力を得ながら、これまで原の辻遺跡で出土した大陸・半島系遺物について検討を行ってきました。

本日のシンポジウムのテーマは「魏志倭人伝の中の倭と韓—烏丸鮮卑東夷伝にみる東アジア交流—」です。当センターは今年度開設 10 周年を迎えます。誰もが知っている魏志倭人伝を糸口にこれまでの日韓双方における発掘調査の成果を照らし合わせて、魏志倭人伝を含む、三国志魏書烏丸鮮卑東夷伝の記述を検証し、弥生時代の東アジア交流を明らかにしていきます。今回、考古学や歴史に見識の深い朝日新聞社の中村俊介編集委員にコーディネートをお願いし、東アジア考古学研究の第一人者である西谷正九州大学名誉教授、韓国の三韓時代に詳しく釜山の第一線で調査研究にあたられている釜山博物館の安海成学芸研究士をお招きして、パネルディスカッションを行います。どうぞ御期待ください。

結びにあたり、講師をお引き受けいただいた先生方をはじめ、関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、今回のシンポジウムを契機に、日本と韓国との文化交流がますます深まりますことを祈念いたしまして、ごあいさつといたします。

令和元年 10 月 19 日

長崎県埋蔵文化財センター所長

石橋 明

目 次

巻頭カラー.....	01 頁
長崎地方は古代東アジア交流の『ハイウエー』 朝日新聞大阪本社編集委員 中村 俊介	03 頁
烏丸鮮卑東夷伝の考古学 海の道むなかた館長 西谷 正	05 頁
魏志倭人伝における往来関係記事と一支国 長崎県埋蔵文化財センター 古澤 義久	09 頁
三韓時代韓半島南部と東アジア社会の変動—『三国志魏書東夷伝』韓・辰韓・弁辰条を中心に— 釜山博物館 安 海成	16 頁
壱岐における交流の実態—魏志倭人伝に記された一支国の世界— 壱岐市教育委員会 松見 裕二	30 頁
講師プロフィール.....	36 頁



原の辻遺跡全景



カラカミ遺跡全景



原の辻遺跡出土の遼東系土器



カラカミ遺跡出土の「周」の字が刻まれた土器



原の辻遺跡出土の遼東系銅釧

長崎地方は 古代東アジア交流の『ハイウエー』

朝日新聞大阪本社編集委員 中村 俊介

たった約 2000 字、されど、2000 字。「魏志倭人伝」に描かれるのは弥生時代後半の日本列島だ。国内にまとまった文字資料が残されていないこの時代、倭人伝は当時の姿を知る、ほぼ唯一の手がかりである。『三国志』の『魏書』が伝える「東夷伝」のなかでその分量は群を抜き、破格の情報量とも言える。なぜだろう。ここから何を読み取るか、研究者たちは長らく苦闘を続けてきた。

今回のテーマ「魏志倭人伝」の考古学と一口に言っても範囲は広い。なかでも注目を集めるのは、そこに描写された 30 のクニグニではないか。それらがどこにあったのかは古くて新しい問題だ。対馬国、一支国（壱岐）、末盧国（唐津付近）、伊都国（糸島周辺）、奴国（福岡平野）……。名ばかりで実態の記述がないものや全国に候補地が点在する邪馬台国は別にして、具体的な風景が描かれるいくつかのクニグニは、ほぼ九州島内に収まる。その九州は、発掘調査が全国的に盛んな弥生研究の本場。つまり、倭人伝という文字史料と考古学的成果とのすりあわせを可能にする地域、それが福岡、佐賀、そして長崎の北部九州なのだ。

近年の研究は、これら北部九州のクニグニの個性を鮮やかに浮かび上がらせ始めている。と同時に、この成果を列島全域に敷衍し一般化させられるのかも重要課題。すなわち、北部九州の実態解明は弥生文化全体の追究に直結し、なかでも朝鮮半島に最も近い島々を有する長崎県は、当時の海外との交流を解き明かす鍵となる地域なのだ。

まず、対馬。対岸の狗邪韓国と倭国本土の接点に位置する、今も昔も最前線の島である。だからだろうか、異形の朝鮮半島製青銅器が見られる一方で、日本の広形銅矛も圧倒的な出土数を誇るなど、他地域とずいぶん様相が違う。銅矛の多量埋納や異例の副葬に境界の守護や結果としての意味を読み取る解釈もある。他地域と一線を画す特異性は、そんな橋頭堡的な地理ゆえか。ここを舞台に、どんな交渉が繰り広げられたのだろうか。

そして、壱岐。倭人伝が「南北に市糶す」と記し、渡来人も多い海上交通の要衝かつ中継貿易を生業とした海洋国家で、特別史跡の巨大環濠集落、原の辻遺跡を擁する一支国の故地だ。カラカミ遺跡や車出遺跡といった重要遺跡も点在する。かつて「首都」原の辻遺跡を複数の衛星集落が取り巻くとの見方が主流だったが、近年の調査研究は修正を迫りつつあるようだ。たとえば、カラカミ遺跡では鉄の生産遺構が見つかり、本土土器の搬入元も原の辻とは違った様相を見せるというから、両者には主従関係以上の役割分担や機能分化があったのかもしれない。

ここでは新発見も相次ぐ。カラカミで「周」の文字を刻んだ土器が確認され、原の辻では銅釧と呼ばれる腕輪が見つかった。これらの出自は中国遼東地域とみられる。狗邪韓国など朝鮮半島を経由したのか、遼東地域から直接もたらされたのか。交易行為を介したのか、それとももっと外交的な来歴、たとえば外交使節の持ち物だったのか。

倭国と中国王朝の交渉は倭人伝や後漢書に記録されているし、実際、九州では国宝の金印をはじめ鏡などの中国系遺物が目立つから、大陸と列島間で公的な往来があったのは疑いない。もし国家外交

の産物ならば、それはかの地の使いが携えた訪問先への贈り物だったのか、それとも、たとえば洛陽に赴く倭人一行が入手した「手土産、だったのか。いずれにせよ、古代東アジアの海を貫く幹線ルートとして、国家外交の舞台だった壱岐のにぎわいを彷彿させてくれる。

対して、本土地域。決して広いとは言えない山がちな地形だけに、遺跡の集積地としてはいま一つ印象が薄いけれど、島原や諫早にも邪馬台国候補地があるくらいなのだから、そこに30国のひとつやふたつ、あってもおかしくない。拠点集落の痕跡は見当たらないのだろうか。

宮室・楼観・城柵、厳かに設け——。倭人伝には、卑弥呼の居所が、そう描写されている。邪馬台国がどこかはともかく、大なり小なりそれは当時のクニグニが抱える拠点集落の風景とみてさしつかえなさそうだ。佐賀の吉野ヶ里遺跡では、環濠に馬面や甕城といった中国都城の特徴を重ねる見解も出ている。なるほど、もし倭人一行が旅の途中で中国の都を見聞したならば、そのエッセンスを故郷の町づくりに採り入れたとしてもあり得ないことではない。のち平城京が唐の長安城をお手本にしたように。ならば、似た構造は原の辻遺跡に見られるのだろうか。対馬や本土、あるいは朝鮮半島で相次ぐ環濠集落にはどうなのだろう。ぜひパネリストのみなさんにお伺いしたい。

ところで、倭人伝が東夷伝の一部なのは、みなさんご存じの通り。その前段には馬韓、辰韓、弁韓といった朝鮮半島のお隣のクニグニが倭人伝同様、紹介されている。そこに描かれた要素や習俗には倭との共通点もあれば相違点もある。お互いを比較すると、当時の東アジア世界の多様性が見えてくるはずだ。

忘れてならないのは、倭人伝が中国歴代王朝の正統を主張する魏の視点から描かれていること。いわば魏中心史観で、そこには当然バイアスがかかっている。弥生時代から古墳時代へ移ろうとしていた3世紀前半、中国はといえば魏、呉、蜀が三つどもえの争いを繰り広げ、それぞれが周辺勢力を自国に引き入れようと躍起になっていた時代だ。遼東に根を張る公孫氏に、魏と呉がともに秋波を送って手なづけようとしたのはよく知られる。とすれば、史料から抜け落ちた、あるいはあえて切り捨てられた倭に関する事実はなかったか。たとえば魏にとっての敵国、呉から倭国へのアプローチだ。九州では江南系の遺物も出土しているし、倭が「会稽東冶（福建）の東」にあるとか、その習俗描写が南方的なもの、なんだか意味深に思えてくる。

以上のような素朴な疑問点は、倭人伝が抱える膨大な謎の、ほんの一部、序の口にすぎない。シンポジウムでは長崎県内の最新調査事例から出発して当時の東アジア情勢まで、思う存分、想像を飛ばたかせてみたい。そのなかから列島や東アジアにおける国際関係の原像も、おのずと浮かび上がることになるだろう。乞う、ご期待！

烏丸鮮卑東夷伝の考古学

海の道むなかた館長 西谷 正

はじめに

私たちにとって、邪馬台国や卑弥呼のことが記載されていて馴染深い「魏志倭人伝」は、よく知られるように、古代中国の歴史書の一つである、『三国志』のうち魏書の中の東夷伝の末尾に、2千字足らずにわたって記述されている。それに先立つ『漢書』地理志は、当時の日本列島人である倭人に関して、わずか19字しか割いていないのに比べると、「魏志倭人伝」は格段に多い情報量を示しており、また、それだけに魏の倭人に対する関心の高さがうかがえるといえよう。

ちなみに、東夷伝は夫余、高句麗、東沃沮、挹婁、濊、韓（馬韓・弁韓・辰韓）と倭人の条から構成されていることも、よく知られる。さらに、東夷伝の前には烏丸・鮮卑伝があり、それらが一括されて、魏書の一部を構成されている点にも意味があるわけである。

というのは、いわゆる中華民族にとって、周囲の未開な異民族に対して、並々ならぬ関心を示している。そのうち、烏丸・鮮卑という北方の遊牧騎馬民族を北狄と見なすとともに、その東方の農耕民族を東夷と総称して、魏書は叙述しているのである。なお、三国の他の呉の西方には西戎が、そして、蜀の南方には南蛮がそれぞれ位置づけられ、中華思想にもとづいて、周囲の異民族を四夷もしくは蛮夷と呼称されていたこともよく知られる。

I. 烏丸伝に見える蛮夷・四夷

まず、烏丸伝を見ると、冒頭部分の最初にある、つぎのような記載が目を引く（以下の現代語訳は、今鷹真・小南一郎訳『正史 三国志4』ちくま学芸文庫、1993、筑摩書房）

すなわち、『尚書』（舜典篇）には、「蛮夷^{ばんい}たちが中華の地を乱す」という記事があり、『詩経』（小雅・六月）は「玁狁^{けんいん}（異民族）の勢いがはなはだ盛んだ」と述べている。彼ら蛮夷のものたちが中国の地^ちに患をもたらすのは、このように古いむかしからのことなのだ。秦・漢以来、匈奴^{きゆうど}が久しく辺境の地に損害を与えてきた。」と見える。

また、同じく冒頭部分の最後に、「烏丸と鮮卑とは古^{いにしへ}に東胡^{とうこ}と呼ばれていた民族である。彼らの習俗や来歴については、漢代の記録者たちの書物に見える。それゆえここでは、漢末魏初以降のできごとだけを取り上げて、四方の異民族のおこした事変の記録に欠けた部分がないようにしようとするのである」と記している。

以上のような冒頭部分の記述は、烏丸・鮮卑という北狄が、中華とくに魏の民族と国家の安泰にとって、重要な民族や地域であったことを物語るといえよう。同じコンテキスト（文脈）で、その先つまり、その東方の夫余、高句麗をはじめ、韓や倭人などを北狄に続く東夷の民族と地域として位置づけられていたのである。

そのような背景から、上述のように烏丸伝の冒頭部分の最後に見えるような、「以備四夷之變」という、『三国志』の著者・陳寿の編集方針の柱の一つが立ったのである。

II. 烏丸・鮮卑伝の考古学

烏丸伝には、後漢の建武 20 (A.D.49) 年に烏丸の首長層が帰順したことで王・侯に封じられたことや、長城の内側に居住するようになった烏丸族に対して護烏丸校尉の官職を与えて統治を委ねたことなどが記されている。このことに関連する遺跡として、内蒙古自治区和林格爾県において、後漢末の塹室墳が知られる。ここでは、「護烏桓校尉」の墨書銘や車馬出行図・四神図などの壁画が描かれている。また、同じく烏蘭察布盟涼城県では、西晋のものではあるが、「晋烏丸歸義侯」金印が出土している。同じような遺物で、同じく涼城県からは、「晋鮮卑歸義侯」金印や「晋鮮卑率善中郎将」銀印も知られる。

烏丸伝は、魏の時代のこととして、太祖・曹操が河北を平定したとき、鮮卑と烏丸が帰順したので、その首長・閻柔を烏丸校尉に任じたと記す。ここで、曹操の高陵が 2008 年に河南省安陽市において発見されたことは記憶に新しいところである。

ついで、鮮卑伝を見ると、首長の歩度根は烏丸校尉の閻柔を通じて、魏の太祖・曹操に朝貢した。文帝・曹丕の代になると、烏丸校尉の田豫が護鮮卑校尉を兼任する一方、歩度根は文帝から王に任命されている。ついで、明帝の永平年間 (A.D.58 ~ 75) には遼東太守は鮮卑を懐柔して、烏丸を牽制することもあった。その過程で、敦煌・酒泉両郡以東の各鮮卑族は遼東郡から賜わりものを受けることもあった。

烏丸もそうであったが、魏が下賜した印章には、「魏鮮卑率善」の呼称を冠した、仟長・佰長・邑長の身分の銅印が認められる。このことは、魏が烏丸・鮮卑の末端組織まで統率しようとした意図がうかがえるといえよう。一方、早く 1956 (昭和 31) 年に内蒙古自治区涼城県で発見された五胡十六国時代初期に当たる鮮卑拓跋部の首長・猗窋 (305 年没) の墳墓からは、金銀器が 13 点出土した。その中には、動物意匠の帯金具が含まれていて、鮮卑族の出自は西方のスキタイに遠いルーツがあることを思わせる。

III. 東夷伝の考古学

東夷伝は、前述のとおり、夫余から始まり、倭人に終る七つの条からなっている。その範囲は、中国大陸の東北部・ロシアの沿海州から朝鮮半島を経て、日本列島にまでまたがっている。そのうち、朝鮮半島の北西部には、前漢末の B.C.108 年に楽浪郡が設置された。その後、後漢末の 204 年頃に、遼東郡太守の公孫氏がその南部を割いて帯方郡を設けた。ここに至って、公孫氏が遼東郡から楽浪・帯方郡までを掌握することになった。しかし、やがて景初年間 (237 ~ 239) に、魏は大規模遠征を行って、公孫淵を誅殺し、楽浪と帯方の二郡を奪還した。それ以後、東夷の諸民族は魏の支配下に入ったが、よく知られるように、公孫氏が失脚した景初 3 (239) 年に倭の女王が魏に遣使、朝貢したと倭人伝は伝える。ちなみに、その際の魏の外交拠点は帯方郡であった。

ところで、東夷伝の最初に登場する夫余は、長城の北に住み、玄菟郡が中国との接点であったことが夫余伝からうかがえる。夫余族は定住生活を営み、五穀を植えるのに適しているのも、農耕民族といえよう。夫余伝に、都とか国ごとに君主、さらには邑落ごとに有力者の存在を示すので、夫余が君主をいただく小国群からなり、都があり、王がいたこと、さらに小国は有力者に統率される邑落群から構成されるという社会組織を思わせる。

夫余の考古資料は、吉林省の老河深や西岔溝の墳墓と、その出土品において知ることができる。挂

甲・触角式把頭鉄剣・金耳飾・前漢鏡など漢式とともに、動物意匠帯金具・銅鍍のような遊牧系の遺物も認められる。夫余伝は、玄菟郡の治所にあらかじめ玉匣を預けておいて、夫余王が死去するとそれを受け取って埋葬したと記す。同じ文脈で木棺にも当てはめ、伊都国の三雲南小路で出土した金銅製四葉座金具を木棺の葬具と考える立場もある。

いま見た夫余の南方で、遼東郡の東側に位置するのが高句麗である。また、高句麗の東に沃沮が、南の東・西にそれぞれ濊と楽浪・帯方が位置する。高句麗伝は、高句麗の地理・歴史あるいは社会組織や暮らし向きなど比較的詳細に記述している。とくに、遼東郡との攻防の様子は詳しく、魏の東方経略の実像が彷彿として伝わって来るのである。考古学的には、幽州刺史の毌丘儉が正始5(244)年に高句麗を討伐したときの紀功碑の断碑が早くから知られる。その碑が立っていた吉林省の集安市には、丸都山城と国内城のような国都の遺跡がよく残っている。高句麗伝は墳墓に関して、石を積んで墳丘を作ると記すが、その記事どおりに積石塚が築かれている。

東沃沮伝は、漢の武帝が元封2(B.C.109)年に衛氏朝鮮国を滅ぼすと、四郡を設置したが、そのうちの玄菟郡の役所を沃沮城に置いたと伝える。この沃沮県城の遺跡は、咸鏡南道の所羅里土城が比定される。そこからは銅鏃・各種鉄器に漢式のもものが認められる。東沃沮伝によると、玄菟郡は現地種族の侵入を受けて、高句麗の西北に移されている。その場所は、当時の高句麗県の所在地と推定されるが、現在の遼寧省新賓県の永陵鎮土城がその遺跡として候補に上がる。

挹婁は、東沃沮の北部と境を接し、夫余の東側に当たる。土地は険しく山地が多いこともあってか、夫余がしばしば討伐を加えたが、最後まで服従させることはできなかったと挹婁伝は記す。また、邑落ごとに首長はいたが、それらがまとまることもなかったようである。生業として、五穀の栽培と猪の飼育を行っていたと伝える。挹婁の考古文化は、中国の滾兎嶺文化やロシアのポリツェI文化に対比される。住いは、穴居すなわち竪穴住居であるが、深さが非常に深いのは、挹婁伝に示すように、気候が寒冷で夫余よりも厳しいことと関係するのであろうか。発掘された竪穴住居にオンドル状遺構が見られるのも、厳寒気候と関係しよう。出土遺物では、アワ・キビなどが検出されており、挹婁伝に示す五穀の栽培の実像に迫るとともに、収穫具としての石包丁と、調理具としての磨臼の出土は農耕関係の石器として参考になる。

一方、東沃沮の南は濊の地域に当たる。濊伝によると単単大嶺すなわち現在の太白山脈以西の地は、楽浪郡の支配下にあり、また、以東の七県は楽浪東部都尉の統治下にあると記す。このことと関連して、濊には侯・邑君・三老といった官があったことにならうか。漢末になると、高句麗の支配下に入ったとも記すが、そのことは広開土王陵碑に見える高句麗の濊への侵攻刻字とも符合する。しかし、正始6(245)年に、楽浪郡太守の劉茂と帯方郡太守の弓遵は出兵して攻撃すると、不耐侯らは配下の邑落を挙げて降伏した。そして、正始8年には魏に朝貢して不耐濊王に冊封されている。

濊に関する考古資料を挙げるとまず、1966(昭和41)年に発見された「晋率善穢伯長」銅印がある。また、江原道の安仁里遺跡や京畿道の大成洞遺跡では、楽浪系土器や鑄造鉄器が出土している。江原道各地で濊の時代に当たる、原三国時代の遺跡が発掘調査されている。その結果、呂字形と呼ばれる出入口を構えた竪穴住居跡と、壁際に作り付けの竈を備えた遺構が検出されている。そして、江陵市の江門洞遺跡では卜骨も出土しているが、これらのことについて濊伝は何も語っていない。

さて、朝鮮半島の南部は韓の世界である。ここは、西南部の馬韓、東南部の辰韓と、その二つの韓

に介在して弁韓の諸国が存在した。諸国とは、馬韓 50 余国（『後漢書』では 54 国）、辰韓 12 国と弁韓 12 国で、合計 70 余（74）国からなっていた。ちなみに、ここでいう国とは、『漢書』地理志に見える百余国の国と同義語で、中国の郡国制度下の概念であって、具体的には日本の律令時代の郡が、一、二郡程度の規模を示す地域集団を指す。つまり、朝鮮半島北西部に設置されていた楽浪・帯方の二郡と韓の諸国という郡国を意味する。

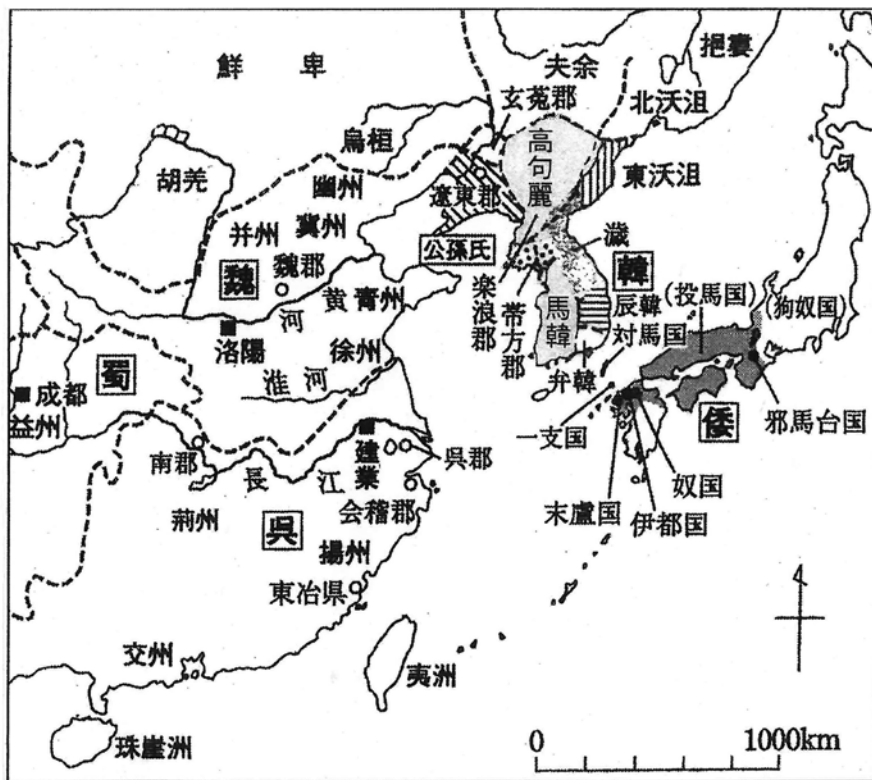
韓の諸国は、考古学的には原三国時代すなわち無文土器（青銅器）時代から三国時代へ移行する過渡期に当たり、そして、三国時代の原型が形成されつつあった時代の地域社会を示す。原三国時代の考古学的な遺跡・遺物に関して、調査・研究の成果には膨大な蓄積があり、字数が限られたここでの論及は避けたい。

東夷伝の最後に言及されている倭人伝については、その記述内容と弥生時代後期の調査・研究の成果は、韓伝の場合と同様であるといっても過言ではあるまい。したがって、ここでは詳述を省略したい。

おわりに

ただ、倭人伝に関して、最近、列島本土の伊都国の故地に当たる、福岡県糸島市をはじめとする西日本各地で、初期の文字文化と係わる硯関連資料の発見が相ついでいることは注目に値する。その流入径路は、おそらく楽浪郡・帯方郡・弁韓というルートであろう。

そして、一支国の故地・長崎県の壱岐市では、「周」という刻字のある灰陶質（瓦質）土器のほか、遼東系土器・銅釧の新たな発見は、倭人伝の交流の世界を楽浪郡から、さらにその北西方の遼東郡へと広げさせてくれた。その背景には、魏の東夷に対する直接（郡）・間接（国）の外交戦略が渦巻いていたのであろう。



三世紀前半の東アジアの政治構造（寺沢薫 2000『王権誕生』日本の歴史 02；講談社）

魏志倭人伝における往来関係記事と一支国

長崎県埋蔵文化財センター 古澤 義久

I. 緒言

三国志魏書烏丸鮮卑東夷伝倭人条（魏志倭人伝）は3世紀の倭の国々への里程、倭人の風俗、女王国と魏の通交などについて記載されている。現在の岐岐島を指す「一大国（「大」は「支」の誤りという）」に関する記述では、その末尾には対馬国の記載と同様に「南北市羅」という語句が現れる。「南北から米穀を買い入れている」という意味であるが、交流の様相の一端を示すものとして重要である。一支国は交流の拠点であったことはこれまで出土した考古資料から明白である。これを踏まえて、本稿では魏志倭人伝の中の往来（外交のみでなく、人の行き来について広く含む）に関係する部分について、実際に出土した考古資料を基に考察することとする。

II. 倭と漢・魏、三韓との通交記事

倭と漢の通交記事として最も古いものは後漢書倭伝にみられる建武中元2年（紀元57年）の倭奴国が東漢に奉貢朝賀し、光武帝が印綬を賜うという記事で、著名な漢委奴国王金印がこのときの印綬に該当するとみられている。魏志倭人伝では景初2年（238年）（梁書倭国伝等では景初3年（239年））の難升米を魏に派遣する記事以降、数次に亘る魏と倭の間の使節相互派遣が記録される（表1）。

倭と三韓の間については直接的な通交記事はほとんどみられない。しかし、魏志倭人伝には一大率に関する記述の直後に「王遣使詣京都帶方郡諸韓国及郡使倭国…」という記載があり、一般的には「王（女王と伊都国王の2説がある）が使者を洛陽、帶方郡、諸韓国へ行かせるときや帶方郡が倭国に使者を派遣する（とき）」と解されているので、三韓諸国に対しても外交使節が派遣されていたことが窺える。

表1 倭と漢・魏の通交記事（石原編訳1985所載年表を改変）

年号	西暦	内容	出典
建武中元2年	57年	倭奴国が後漢に奉貢朝賀し、光武帝が印綬を賜う	後漢書倭伝
永初元年	107年	倭国王帥升らが生口160人を献じ、請見を願う	後漢書倭伝
景初2年 または3年	238年または 239年	6月、倭の女王卑弥呼が大夫難升米らを帶方郡に遣し、帶方太守劉夏は洛陽に詣らせる →12月、魏の明帝が親魏倭王卑弥呼に制詔する	魏志倭人伝ほか 魏志倭人伝ほか
		魏の太守弓遵が建中校尉梯儻らを遣わし、詔書・印綬を奉じて倭国に詣る →倭王は使に因って上表し、詔恩を答謝する	魏志倭人伝 魏志倭人伝
正始4年	243年	倭王が大夫伊声耆・掖邪狗ら8人を魏に遣わす、掖邪狗らが率善中郎将の印綬をうける	魏志倭人伝
正始6年	245年	詔して倭の難升米に黄幢を賜う	魏志倭人伝
正始8年	247年	倭王卑弥呼が倭載斯烏越らを帶方郡に遣わし、狗奴国との交戦の状を説く	魏志倭人伝
		→塞曹掾史張政らを遣わし、詔書・黄幢を難升米に賜い、檄をつくって告諭する	魏志倭人伝
		張政らが檄をもって倭の女王壺与を告諭する →壺与が掖邪狗ら20人を遣わし、政らの帰国を送って魏都洛陽に詣る	魏志倭人伝 魏志倭人伝
泰始元年	265年	倭王が使を遣わし、訳を重ねて入貢する	晋書倭人伝

III. 原の辻における楽浪系土器の器種組成

このように魏志倭人伝を前後する時期には漢・魏や三韓諸国と外交使節の往来があったことがわかるが、これに関連する考古学的な事象として原の辻出土の楽浪系土器について触れたい。原の辻では弥生時代後期の大陸・半島系土器として三韓系土器と楽浪系土器（図1）の2者が認められる。三韓系土器は多様な器種が出土しているが圧倒的に多いのは運搬具である短頸壺である。そのため、宮崎

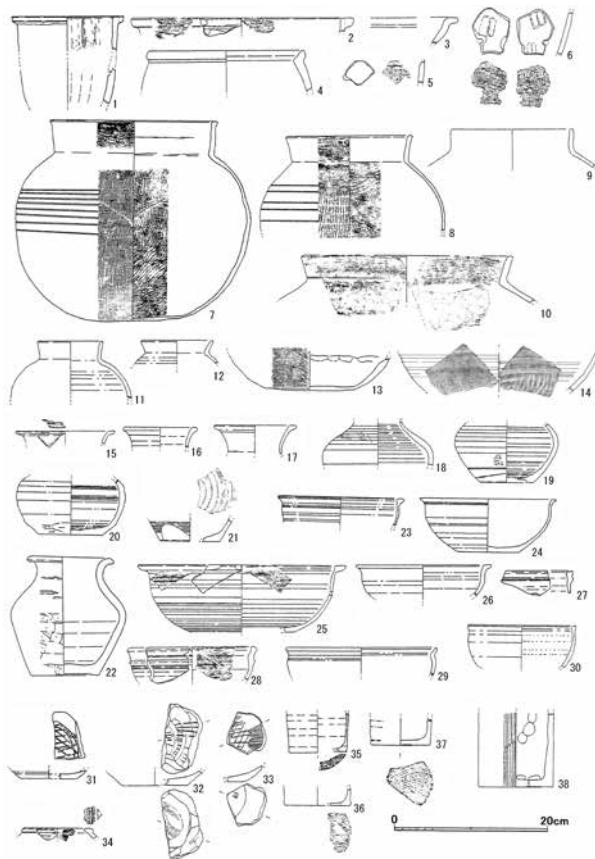


図1 原の辻出土楽浪系土器

碗類を運搬するときには重ねることができる。限られた船内空間に対して収納という点では相当有利な器種である。そのため、個数という点だけから見ると、船載された楽浪系土器中において鉢・碗類は相当数を占めていた可能性が高い。船による運搬という過程を経た器種組成比率は、楽浪郡・帯方郡内における城址などの生活に伴う器種組成比率とは異なる可能性が高い。原の辻をはじめ日本列島で出土する楽浪系土器は、言うなれば「旅行者の器種組成」という特徴を有していると考えられる（古澤 2019a）。倭人の手に渡った後の状況（交易品として利用されるなど）については、現況ではこれ以上判断することが困難である。

搬入に有利な器種という条件を確認した上で、なぜ鉢・碗類が多量の搬入に選択されたのかという点を検討するに際しては、交渉の場での会食に注目した長友（2010）の指摘が参考となる。外交使節は印綬、詔書、黄幢など帝国の威信を示す物品を下賜しているように、威厳を示すことは極めて重要であったと思われる。このとき外交使節の食事に際して相手側（倭）の食器（弥生土器）に大きく依存するようなことは考えにくい。そのため移動に伴う臨時的措置であっても、漢・魏式の食器組成で食事に臨んだ可能性があり、これが楽浪系土器の鉢・碗類の多量出土に反映された可能性がある。

IV. 壱岐島出土遼東系資料

原の辻では少数であるが、遼東系土器が出土している。図2-1の壺は遼東系土器（鄭仁盛 2003）あるいは遼東・山東系土器（寺井 2007）として注目されたが、遼東地域や山東地域の西漢中期～東漢後期の資料に類例がある。図2-2の蓋は、遼東地域の西漢後期～王莽新・東漢初期の資料に類例がある。最近ではカラカミでも「周」字が刻まれた遼東系折腹盆が出土した（図2-4）。器形は東漢代の遼東地域に類例がみられる。また、「周」字は波磔が発達し、東漢代に普遍化した隸書八分体とみ

貴夫は、運搬具が中心に原の辻丘陵部の環濠内に搬入されたとみて、環濠内で饗応を受けていたと想定している（宮崎 2000, 2005）が、三韓系集団については妥当な見解であると考えられる。一方、楽浪系土器も同様に短頸壺が多く出土しているが、碗・鉢類が相当数みられ、筒杯や小型壺も一定量みられる。壱岐に限らず日本列島で出土する楽浪土器では鉢・碗類が相対的に多い。このことについて楽浪系鉢・碗類自体が楽浪人から入手された後に交易品として二次的に流通したという見解（寺井 2007、森本 2015）がある。これに対して、鉢・碗類が価値の高い交換物であったとは見做せないとし食膳具である以上、交渉の場である会食において用いられたとする見解もある（長友 2010）。

鉢・碗類は中に内容物を入れて運搬する器種ではない。そして口縁内径は少しずつ変異があり、中型品（図1-25）と小型品（図1-23、24、26～30）が認められる。そのため、複数の鉢・

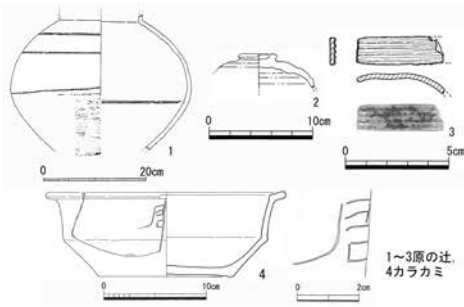


図2 壱岐島出土遼東系遺物

流によってもたらされた可能性である。

近年、原の辻では王莽新・東漢初に編年される遼東地域に特徴的な銅釧が出土していたことが判明した(図2-3)(古澤・片多2017)。この種の銅釧は、遼東郡における非漢族集団(徐政・白宝玉2015)でしかみられず、これまでのところ楽浪郡域では出土してないことから、遼東郡との交流も窺わせる資料である。このため、遼東系土器についても遼東郡との交流の結果もたらされた可能性が小さくはないものとみられる。このように遼東郡との交流が想定された場合、その背景が問題となる。漢系文物の入手を目的とした交易であれば楽浪郡・帯方郡との交流で十分であるので、交易以外の目的が想定される。魏志倭人伝には、倭の使節は帯方郡までしか到達しなかった事例とともに、皇帝に謁見するなどの目的で洛陽まで到達した事例もあったことが記される。遼東郡は洛陽—楽浪郡間の交通において必ず通過する位置にあることから(高倉2008)、外交によりもたらされた可能性も考えられる。

V. 一支国と三韓の交渉

先述のとおり倭と三韓の外交的な使節の往来があったことは魏志倭人伝の記述からも窺うことができる。一方で外交ではなく交易も行われていた。壱岐では原の辻、カラカミ、車出のような大・中規模遺跡では楽浪系土器と三韓系土器の双方が出土する一方、名切など小規模遺跡では三韓系土器が主として出土しており、楽浪系集団と三韓系集団の渡来目的が異なっていたものとみられ、三韓系集団は楽浪系集団に比べるとより日常的な交易の比重が高かったものと考えられる(古澤2017a、b、2018)。烏丸鮮卑東夷伝弁辰条には、「国出鉄韓濊倭皆従取之諸市買皆用鉄如中国用銭又以供給二郡([弁辰の]国々では鉄を産出する。韓・濊・倭がみな鉄を取っている。どの市場の売買でもみな鉄を用いていて、中国で銭を用いているのと同じである。そしてまた[鉄を楽浪・帯方]二郡にも供給している。)」という記述がみられる。そのため、交易の内容として、具体的には鉄の交易が注目されてきた

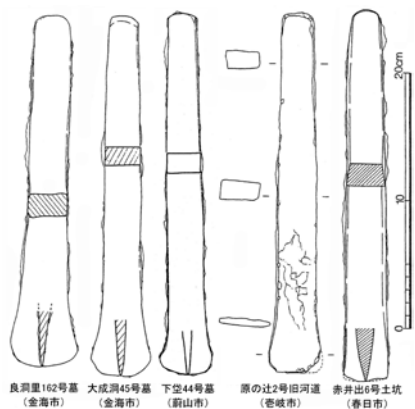


図3 日韓出土棒状鉄斧

(東2002)。韓半島南部で用いられた規格化された棒状鉄斧が原の辻でも出土している(図3)。ただし、韓半島南部では墓から出土することが多いのに対し、原の辻では河川跡で出土しており倭における独自の使用法があった可能性もある(古澤・安海成2017)。また、原の辻出土鉄器のうち鉄鎌については刃部を下にして折り返しのある面を表にしたとき折り返しが右となる楽浪郡・日本列島に多い「折り返し甲技法」のものと、折り返しが左になる韓半島南部に多い「折り返し乙技法」がほぼ同数出土していることから韓半島南部からの鉄製品の搬入も想定されている(村上2007、山梨2017)。近年、カラカミでは韓

半島製の踏鋤（叫叫）も出土し、やはり鉄をめぐる交易があったことが立証される。

VI. 交流における一支国人の役割

交流の担い手として倭の水人（海に対して生計の依存度が高く、漁撈や交易に従事する集団）を想定する研究（岡崎 1968）がある。武末純一は靉島出土鯨骨製・鹿角製のアワビおこし及び鹿角製西北九州型釣針から靉島に移住した弥生人の中には、北部九州の倭の水人が相当数含まれ、山陰地域の水人も一部含まれているとみている（武末 2008a、2009）。これに関連して筆者は鯨骨製紡錘車に注目している。原の辻やカラカミでこれまで9点の鯨骨製紡錘車が出土しており、壱岐に特徴的な遺物である。壱岐の鯨骨製紡錘車のうち、円盤型は城ノ越式期～須玖 I 式期に出現し、後期まで存続する一方、抹角方形型は後期に出現するようである。青谷上寺地出土鯨骨製紡錘車は弥生時代後期初頭～古墳時代初頭に属する。靉島 A 地区 N3E2Grid では円形粘土帯土器、三角形粘土帯土器そして須玖 I 式土器が出土しており、詳細な時期の把握は困難であるがおおむね弥生時代中期に併行するものとみられ、時期的な併行関係には大きな問題はなさそうである（図 4）。鯨骨で製作した紡錘車を使用する習慣が壱岐を中心とする各地域にみられるということは確実なので、各地域の水人、とりわけ出土数の多さから壱岐の水人が韓半島南部から日本海沿岸の交流を担った可能性は高いだろうと判断される。

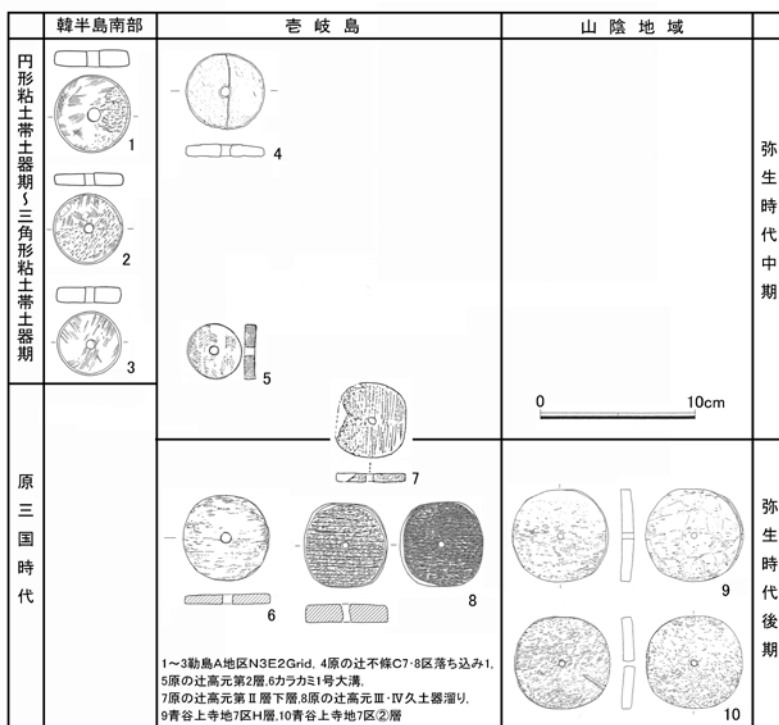


図 4 日韓出土鯨骨製紡錘車

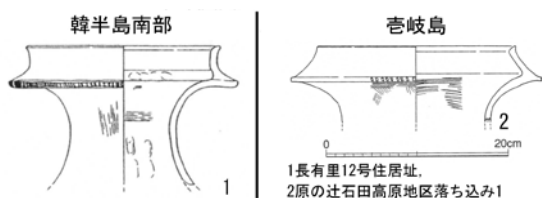


図 5 壱岐及び韓半島南部出土豊前系土器

以上の状況は弥生時代中期の状況であるが、弥生時代後期に至ると韓半島南部での交流拠点は靉島から金海に遷移する（井上 2014）。この時期の韓半島南部でも弥生系土器が出土している。金海市長有里 12 号住居址では豊前系土器が瓦質土器とともに出土しているが、久住猛雄によると当該土器は高島式で弥生時代後期後半古相～新相初期に位置づけられるという（久住 2015）。長有里出土豊前系壺と類似した特徴を持つ豊前系壺は原の辻でも発見されている（図 5）。そのため、魏志倭人伝の対象時期を前後する時期の日本列島各地域と韓半島南部を結ぶ交流においても、壱岐島の集団の関与があったことを想定することができる。

VII. 交易の機構

このように一支国人に交流の担い手としての性格が認められる一方、一支国自体に市場がおかれた

ことも想定される。魏志倭人伝には対馬国と一支国に関する記述に「南北市糶」がみえ、米の取引を行っていたことは十分に想定される。風俗記事の中にも「国国有市交易有無使大倭監之（国々に市がある。さまざまなものを交易している。大倭（大倭の実態については諸説あり）にこれを監督させる。）」とあり、権力によって管理された市場が存在したことを伝えている。原の辻では弥生時代後期の段階でも多彩な大陸系文物が出土しており（図6）、三韓のほかに漢・魏とも交易があったことは疑いないことから、一支国の場合は国内市場以外に貿易市場があったものとみられる。青銅製の権（図6-4）は実際に権として利用されたか否か慎重な検討が必要であるが、市場の存在を示唆する資料である。

久住猛雄は原の辻では楽浪系土器と三韓系土器の両者が出土するが、糸島では三韓系土器の出土が少ないことから、政治的交渉や威信財交易を行う楽浪漢人は糸島の三雲を訪問できたが、三韓人の交易者の多くは外港としての壱岐止まりで日常財交易を行うという機能分担が想定される「原の辻＝三雲貿易」を提唱している。その後弥生時代終末期～古墳時代初頭に西新町を中心とする「博多湾貿易」へ変遷するとした（久住 2007）。久住の見解を受けて宮崎貴夫は「原の辻＝三雲貿易」段階では原の辻が対外交易の拠点（市場）としての役割を果たしたが、「博多湾貿易」段階ではその役割が相対的に低下し、交易の中継基地となり住民自らが出向いて交易を行わざるを得なくなったという状況を想定している。そしてこの状況が「南北市糶」として記述されたとする（宮崎 2012）。しかし、西新町が交易の中心となった段階でも原の辻では後期瓦質土器や陶質土器が多量に出土し、依然交易の拠点としての機能が認められる。さらに、西新町では馬韓系土器が多数確認されるが、原の辻では馬韓系土器の比率は相対的に低いなど組成にも差があることから博多湾との中継も行う一方、独自の市場を維持していた可能性もあると考えられる。魏志倭人伝にみられる「国国有市」の国々には一支国が含まれ、その情景が描写されたものとみることができるのではないだろうか。

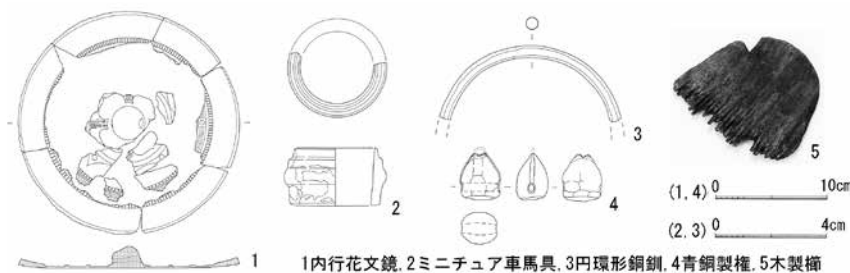


図6 弥生時代後期原の辻出土漢・魏系遺物

VIII. ト骨

壱岐島では早くからト骨の出土が注目されてきたが（木村 1979）、これまで原の辻で15点程度、カラカミで12点程度のト骨が出土している。素材はシカとイノシシの両者がみられる。最も古い事例は弥生時代中期中葉の事例で、原の辻高元地区の7号住居跡では確実にト骨に使用されたト骨2点（図7-1、2）と4点の肩胛骨片が出土した。時期的に併行関係にある靉島ではト骨が集積された状態で出土しており、原の辻の同一住居内での複数出土と関連があるものと考えられる。弥生時代後期にも原の辻、カラカミ両遺跡でト骨が出土する。特にカラカミでは環濠から出土する事例が多数を占め、ト骨後の廃棄と見る見解と環濠を意図的に埋めた際の祭祀に関連するという見解がある。環濠内の堆積土からの出土のため、詳細な時期を限定することは難しいが、弥生時代後期前半のもの（図7-3～9）が認められる一方、弥生時代後期後半に埋められた土からト骨が出土する（図7-10～12）ことがあり、魏志倭人伝が対象とする時代まで存続したものとみられる。

ト骨により農事・天候などについて占われたとする従来の見解に対し、渡辺誠は史記などの内容を基に厳しく批判した（渡辺 2002）。それでは、何が占われたのであろうか。魏志倭人伝には「其俗挙

事行来有所云為輒灼骨而占以吉凶」という一節がみられる。このうち「挙事行来」は「挙事（事をあげ行う、事業や仕事をはじめめる）や往来」（石原編訳 1985）、「行事を行うとか、旅行に出るとか」（江畑・井上訳注 1974）、「年中行事とか、遠くへ旅立つ」（藤堂・竹田・影山訳注 2010）などと訳されてきた。いずれにせよト骨によって占われる内容として行事とともに、往来・旅行についての事項が特記されていることは注目すべきである。

日本列島におけるト骨に関する近年の集成（浪形 2009, 國分 2014）を参照しても、壱岐島では九州で最も多量のト骨が出土している。考古資料が示すとおり活発な往来があり、かつ旅行が危険を伴う航海によるという条件下にある壱岐島では、往来・旅行に関する占いが多く行われた結果、多数のト骨が出土したものと理解できないだろうか。壱岐島に限らず日本列島全体でみてもト骨出土遺跡は海に近接した立地が目立つこともこのことを補強する。

青谷上寺地で出土した約 250 点のト骨にはさまざまな焼灼、整治が認められるが（北浦 2008）、共通する属性が壱岐島のト骨

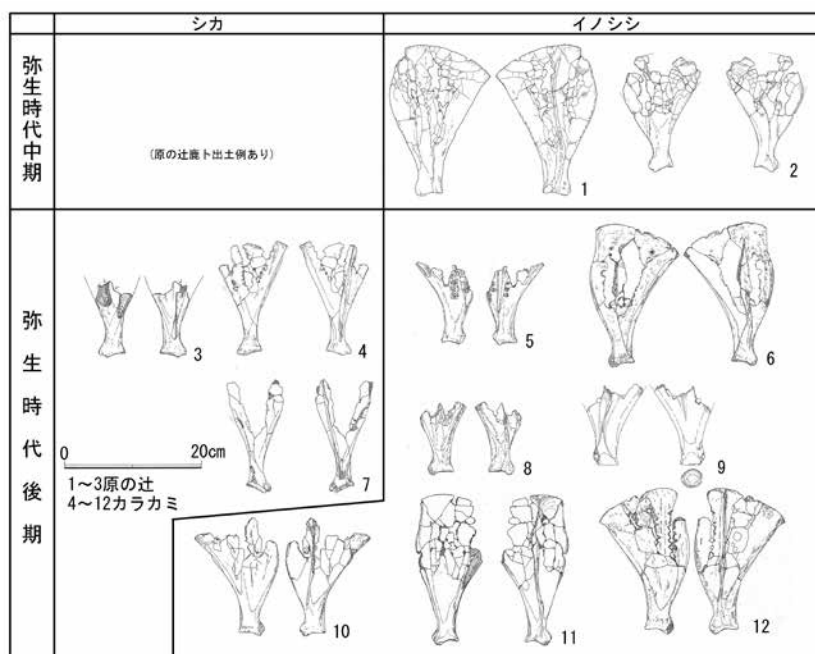


図7 壱岐島出土ト骨

にも認められる（水村 2010）。日本海沿岸を通した相互の交流が想定されるが、青谷上寺地もやはり沿岸の交流拠点であったことから、壱岐島と類似した状況にあったものと思われる。

以上の考古資料と史書との対応から、ト骨についての魏志倭人伝の記録は壱岐島での実際の見聞に基づくという木村幾多郎（1979）や森浩一（2010）の指摘は正鵠を射ているものとみられる。

IX. 結語

これまで、一支国と魏志倭人伝の関係については里程記事にみられる一支国に直接言及した 57 字が特に注目され、検討されてきた。ところで、帯方郡の使節は伊都国までしか来ていないとみる説と女王国まで来ているとする説の 2 説があるが、確実に、高頻度に往来した地域としては対馬国、一支国、末盧国、伊都国が該当する。本稿で示したとおり壱岐における楽浪系土器や遼東系資料の様相はこのことをよく反映している。そのため倭人の風俗について記した記事は、一支国などで実際に見聞した光景を基に作成されたものとみられ、そのことを本稿ではト骨などを例に挙げて示した。実際には北部九州の一部地域での風物であっても、それが倭全体を代表する風物として描かれた可能性が高い。その点では、今後も一支国の実態を継続して解明することは、里程記事のみならず、風俗記事も含めた魏志倭人伝全体、あるいは東北アジア全体を見渡す烏丸鮮卑東夷伝全体をより深く理解する上で、極めて重要であると思料される。

文献

〈日文〉

- 東 潮 2002 『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』六一書房
- 石原 道博 編訳 1985 『新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波書店
- 岡崎 敬 1968 「倭の水人」『日本民族と南方文化』平凡社
- 井上 主税 2014 『朝鮮半島の倭系遺物からみた日朝関係』学生社
- 江畑 武・井上 秀雄 訳注 1974 「三国志魏書倭人伝」『東アジア民族史1』平凡社
- 北浦 弘人 2008 「青谷上寺地遺跡出土土骨の属性類型の再検討について」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』2
- 木村幾多郎 1979 「長崎県壱岐島出土のト骨」『考古学雑誌』644
- 久住 猛雄 2007 「「博多湾貿易」の成立と解体」『考古学研究』53-4
- 久住 猛雄 2015 「「奴国の時代」の暦年代」『新・奴国展』福岡市博物館特別展図録
- 國分 篤志 2014 「弥生時代～古墳時代初頭のト骨」『千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』276
- 高倉 洋彰 2008 「遣漢使節の道」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室
- 武末 純一 2008 「韓国・靑島遺跡のアワビおこし」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室
- 武末 純一 2009 「三韓と倭の交流」『三国志』魏書東夷伝の国際環境』国立歴史民俗博物館研究報告第151集
- 谷 豊信 2008 「漢代製陶業に関する研究ノート」『中国考古学』8
- 寺井 誠 2007 「日本列島出土楽浪系土器についての基礎的研究」『古文化談叢』56
- 藤堂 明保・竹田 晃・影山 輝國 訳注 2010 『倭国伝 中国正史に描かれた日本』講談社
- 長友 朋子 2010 「楽浪土器からみた交流関係」『待兼山考古学論集Ⅱ』
- 浪形早季子 2009 「弥生時代のト骨の再検討」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』1
- 古澤 義久 2016 「原の辻遺跡の性格と他地域との関係」『靑島와 하루노쓰지를 통해 본 東아시아 交流의 様相』国立晋州博物館
- 古澤 義久 2017a 「壱岐市名切遺跡出土韓半島系土器について」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』7
- 古澤 義久 2017b 「弥生時代土器からみた日韓交流」『考古学으로 본 三韓時代 東아시아 文化交流』釜山博物館
- 古澤 義久 2018 「弥生時代壱岐島における韓半島系資料」『土器・金属器の日韓交渉』
- 古澤 義久 2019a 「弥生時代における壱岐島と韓半島・遼東地域との交流」『第30回東アジア古代史・考古学研究会交流会研究発表会資料集』
- 古澤 義久 2019b 「カラカミ遺跡出土「周」字線刻遼東系土器の検討」『市史跡カラカミ遺跡6次・市史跡カラカミ遺跡7次・国特別史跡原の辻遺跡』壱岐市文化財調査報告書第29集
- 古澤 義久・安 海成 2017 「海峡を越えた棒状鉄斧」『鉄を求めて大海を渡る。』長崎県埋蔵文化財センター
- 古澤 義久・片多 雅樹 2017 「原の辻遺跡出土遼東系銅釧について」『九州考古学』92
- 水村 直人 2010 「青谷上寺地遺跡出土土骨の諸様相について」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告5骨角器(1)』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告32
- 宮崎 貴夫 2000 「原の辻遺跡の朝鮮半島系土器について」『原の辻ニュースレター』5
- 宮崎 貴夫 2001 「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』4
- 宮崎 貴夫 2005 「土器」『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集
- 宮崎 貴夫 2012 「「南北市羅」考」『古代壱岐島の世界』高志書院
- 村上 恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 森 浩一 2010 『倭人伝を読みなおす』筑摩書房
- 森本 幹彦 2015 「外来系土器からみた対外交流の様相」『古代文化』66-4
- 山梨 千晶 2017 「壱岐における弥生時代の鉄」『鉄を求めて大海を渡る。』長崎県埋蔵文化財センター
- 渡辺 誠 2002 「ト骨・ト甲でなにが占われたのか」『考古学ジャーナル』492

〈韓文〉

- 鄭 仁盛 2003 「弁韓・加耶의 対外交渉 - 楽浪郡과의 交渉關係를 中心으로 -」『伽耶 考古学의 새로운 照明』

〈中文〉

- 徐 政・白 宝玉 2015 「鞍山羊草莊墓地乙類墓葬属性再探討」『羊草莊漢墓』文物出版社

三韓時代 韓半島 南部와 東아시아 社會의 變動

—『三國志魏書東夷傳』 韓·辰韓·弁辰條를 中心으로—

부산박물관 안해성

I. 머리말

『三國志魏書東夷傳』은 西晉의 陳壽 (233~297) 가 太康 年間 (280~289) 에 저술한 『三國志魏書』 제 30 권에 수록된 『烏丸鮮卑東夷列傳』 중 東夷에 관한 부분을 뜻한다. 구성은 서문을 비롯하여, 鮮卑·夫餘·高句麗·東沃沮·挹婁·濊·韓·(州胡)·辰韓·弁辰·倭의 순서로 이어진다. 『三國志魏書東夷傳』은 3세기 후반 동아시아 고대 사회의 생활상을 최초로 기록한 史書라는 점과 동 시대에 기록된 유일한 史書라는 점에서 높은 평가를 받고 있다. 그러나 史書의 기술은 중국인의 관점에서 동아시아사를 피상적으로 바라보고, 내용이 박약하여 비판적인 시각으로 바라볼 필요가 있다. 본고에서는 『三國志魏書東夷傳』 중 三韓과 관련된 韓·辰韓·弁辰의 기록을 중심으로 古代 韓半島 南部와 동아시아 사회의 일면을 고고학적 성과와 더불어 살펴보고자 한다.

II. 三韓의 成立과 韓半島 南部地方 物質文化의 變動

韓國의 初期鐵器-原三國時代에 해당하는 시기의 南部地方에는 三韓이 성립해 있었다. 三韓은 서쪽 馬韓, 동쪽 辰韓, 남쪽 弁韓으로 나뉜다. 『三國志魏書東夷傳』의 三韓 기록은 韓·辰韓·弁韓으로 구분되지만 서술하는 과정을 살펴보면, 하나의 나라로 인식하는 경향도 보인다. 기록의 대부분은 韓條에 置重하여 서술되고, 辰韓條와 弁辰條는 소략한 편이다. 韓條의 첫 머리에는 韓의 구성과 위치에 대한 내용이 나오며, 이어 韓과 漢郡縣 사이의 사건 관련 記事가 주를 이룬다. 마지막으로 韓의 풍속과 제도에 대한 내용과 말미에는 州胡에 대한 내용이 나온다. 辰韓條와 弁辰條에는 위치와 풍속, 제도에 대한 내용이 간략하게 다루어진다.

『三國志魏書東夷傳』 韓條에는 韓의 성립을 자세히 다루고 있다. 그 시점은 衛滿에 의해 古朝鮮에서 축출된 準王의 南下로부터 찾고 있다. “侯 準이 王이라 일컬었으나 燕國의 亡人 衛滿에게 공격받아 나라를 빼앗겼다. 그는 좌우 將軍과 宮人을 데리고 바다 건너 韓에 거처하며 스스로 韓王이라 일컬었다. 위략에 이르길 그의 자손은 나라에 남아 그대로 韓氏 성을 사용하였다. 준은 해외에서 왕이 된 이후 조선과 왕래하지 않았다. 그 뒤 절멸하였으나 지금 韓人 중에는 아직도 그의 祭祀를 받드는 사람이 있다.” 라고 기록¹ 되어 있다. 『三國志魏書東夷傳』에 기록된 韓王을 자처한 準王의 등장 시점을 韓의 성립으로 보고 있다. 이 시점은 B.C.194~180년 사이의 사건으로 기원전 2세기 전엽경²이다. 그러나 辰王이 馬韓의 月支國을 통치한다는 기록³과 弁韓과 辰韓의 12국이 辰王에게 臣屬되어 있다는 기록⁴

¹ 『三國志魏書東夷傳』 韓條, “侯 準既僭號稱王, 爲燕亡人衛滿所攻奪, 將其左右宮人走入海, 居韓地, 自號韓王. 魏略曰 其子及親留在國者, 因冒姓韓氏. 準王海中, 不與朝鮮相往來. 其後絕滅, 今韓人猶有奉其祭祀者.”

² 『三國志魏書東夷傳』 韓條에는 準王의 南下 시기가 적시되어 있지 않고, 『史記 朝鮮列傳』에는 孝惠高后 (B.C. 195~180) 연간으로 되어 있으며, 『三國史記』에서는 B.C. 194년으로 기록되었다. 후대의 기록은 『史記』의 내용을 윤색하였을 가능성이 있다.

³ 『三國志魏書東夷傳』 韓條, “辰王治月支國”

⁴ 『三國志魏書東夷傳』 韓條, “其十二國屬辰王 辰王常用馬韓人作之”

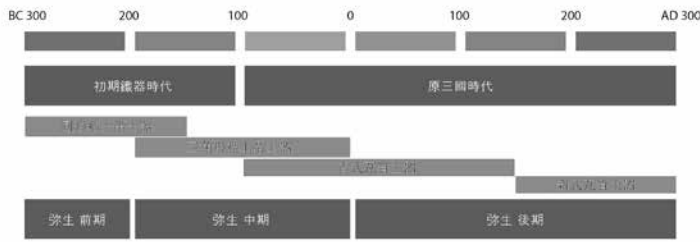


표 1. 삼한 - 야요이시대 역연대 모식도
 表 1. 三韓—弥生時代歷年代模式圖

을 볼 때 三韓은 그 이전부터 성립되었다고 보는 것이 타당하다. 그러므로 韓半島 南部 지역은 準王의 南下를 기점으로 三韓의 原住民과 古朝鮮으로부터 나온 移住民은 같은 시기에 존재하였다고 여겨진다. 본고에서는 三韓의 성립 시점과 準王의 南下에 따른 文化 변동을 고고학적 지표를 통해 살펴보겠다.

1. 三韓의 성립

三韓 사회 성립의 고고학적 지표는 圓形粘土帶土器와 더불어 韓國式銅劍·多鈕粗紋鏡 등 계층 사회의 면모를 보여줄 수 있는 새로운 위세품의 등장 시점을 생각해 볼 수 있다. 圓形粘土帶土器文化는 外來界土器文化가 토착화되어 가는 基層文化로서 初期鐵器時代 동안 지속적으로 존속하며, 韓國式銅劍·多鈕粗紋鏡을 비롯하여 劍把刑銅器·圓蓋形銅器·喇叭形銅器 등 異形靑銅器가 새롭게 등장한다. 韓半島 중서부지역에서 등장하는 異形靑銅器는 그 조형을 沈陽 鄭家窪子遺跡에서 찾을 수 있다. 多鈕雷紋鏡+遼寧式銅劍+圓蓋形銅器+防牌形銅器+喇叭形銅器로 이루어져 있는 鄭家窪子 6512 號 무덤의 靑銅器 조합은 古朝鮮 祭器 조합으로 추정된다. 이러한 祭器 조합은 大田 槐亭洞·牙山 南城里·禮山 東西里에서 확인되는데 등장 시점은 韓國式銅劍과 多鈕粗紋鏡을 기준으로 鄭家窪子 6512 호묘보다 늦은 단계이다. 沈陽 鄭家窪子 6512 號의 연대를 기원전 4세기 후반으로 제시한 宮里修⁵는 韓半島 중·서부지역 異形靑銅器 조합의 등장 시점도 동일하게 보고 있다. 그러나 遼寧式銅劍+雷紋鏡 조합보다 韓國式銅劍+多鈕粗紋鏡 조합의 형식학적 단계는 시간의 차이를 반영하므로 鄭家窪子 遺跡의 연대보다 늦은 시점에 등장한 것으로 판단된다. 韓半島 南部 粘土帶土器文化와 韓國式銅劍文化는 새로운 文化 변동을 일으켜 靑銅器時代 松菊里文化를 종료시킨다. 이러한 文化 변동 시점을 三韓 사회의 성립 단계로 볼 수 있다.

2. 準王의 南下와 馬韓 사회의 변화

準王一派가 韓半島 南下를 시작하는 시점은 衛滿의 朝鮮攻奪로 시작되며, 이 시점은 B.C. 194~180년 사이의 사건으로 기원전 2세기 전엽경이다. 조선에서 바다를 건너 “韓王”이라 일컬었으니 ‘韓’이란 곳은 韓半島 南部일 것이며, 三韓 前期文化의 중심지인 중서부지역으로 보는 것이 일반적이다. 신문물을 갖춘 準王一派는 韓半島 南部 사회에 物質文化 변동을 일으키며, 이러한 物質文化의 파급 경로는 해로를 따라 이루어지는 경향을 보인다. 새로운 物質文化의 변동이란 銅鏡은 粗紋鏡에서 細紋鏡으로 발달하고, 靑銅器는 異形靑銅器·銅鈴 등 儀器 중심의 구성에서 銅矛·銅戈 같은 武器나 銅斧·銅鑿·銅鈹 같은 實用具 중심으로 전환된다. 뒤이어 韓半島에 鐵器가 初顯하면서 靑銅 實用具는 점차 鐵器로 대체된다.

韓國式銅劍文化의 변화는 三韓 原住民들의 주도적인 文化변동으로 생각되며, 鐵器文化의 初顯은 移住民에 해당하는 準王의 南下에 따라 등장한 것으로 생각된다. 이 시점의 新文化는 土着文化를 파괴하지 않고, 동화되어 가는 특징을 보인다. 새로운 鐵器文化는 靑銅器文化에도 영향을 주어 靑銅製 實用

⁵ 宮里修, 2010, 『한반도 청동기의 기원과 전개』, 사회평론

具는 점차 鐵器로 전환된다. 그렇지만 기층적인 粘土帶土器文化나 韓國式銅劍文化는 여전히 유지된다. 기존의 韓國式銅劍文化에 鐵器를 받아들인 새로운 三韓文化로 전환된 것이다. 『三國志魏書東夷傳』에는 三韓의 통치자를 “辰王”이라 표현하고, 準王은 “韓王”을 자칭한다. 原住民의 통치자인 “辰王”과 移住民들의 “韓王”은 馬韓 일대에 일정기간 공존하였을 것이다. 準王一派가 南下하여 馬韓을 공격하고 나라를 세웠을 가능성⁶도 있다. 그러나 이 시기의 馬韓은 여러 소국으로 구성된다. 準王一派는 새로운 터전을 잡기 위해 몇몇의 소국과 국지적인 전투를 벌였을 가능성은 있지만, 馬韓 전체에 대한 토벌을 감행할 의지는 없었을 것이다. 移住民들이 馬韓의 文化를 파괴하거나 대체하는 현상은 보이지 않기 때문이다. 이처럼 原住民과 移住民은 서로 충돌하지 않고 文化교류를 하며 共存하였다고 본다.

準王은 바다를 건너 이후 조선과 왕래하지 않았으며, 왕으로 자처할 정도의 세력을 유지하였다⁷. 거대한 세력이 바다를 건너 一派를 이룰 정도라면, 準王 一派는 상당한 규모의 海上船團을 거느렸을 가능성이 높다. 이러한 海上船團을 이용해 韓半島 南部 해안 일대의 文化를 빠르게 변화시켜 나갈 수 있었을 것이다. 韓國式銅劍文化와 새로운 鐵器文化로 대표되는 三韓文化는 海路를 따라 호서-호남지방을 거쳐 이동하며, 北部九州까지 도달하였을 것으로 생각된다. 日本 北部九州에서 이타즈케Ⅱc(板付Ⅱc) 또는 조노코시 단계부터 圓形粘土帶土器-韓國式銅劍-多鈕細紋鏡-鐵器文化가 등장하는 까닭과 무관하지 않으며, 결국 야요이시대 중기로 전환되는 계기를 만들었다고 본다. 최근, 忠州 虎岩洞遺蹟 1號 積石木棺墓에서 細形銅劍 7점과 多鈕細紋鏡 破鏡 1점, 銅斧·銅鑿·銅鉤 조합이 출토⁸되었다. 이러한 文化 양상은 馬韓의 특징적인 靑銅器 조합이며, 韓半島 南部 내륙까지 馬韓의 文化요소가 확인되는 것으로 보아 馬韓 小國의 영역이 상당히 넓었음을 시사한다. 한편, 이러한 文化 전파 경로에서 辰韓과 弁韓에 해당하는 영남 해안 일대가 배제된다. 準王一派가 보유한 多鈕細紋鏡⁹과 鐵器文化가 보이지 않기 때문이다.

결론적으로 準王一派 중 일부는 馬韓地方에 정착하였을 것이고, 原住民과 타협에 의한 정착일 가능성이 높다. 재지의 粘土帶土器文化를 수용하며, 선진 집단은 全國界 鐵器文化를 가지고 들어 왔다. 『三國志魏書東夷傳』에 ‘準王一派가 절멸되었다’는 記事로 미루어 準王一派로 추정되는 집단은 馬韓地方에서 일시적으로 머물다 소멸되거나 융화된 것으로 판단된다.

3. 歷谿卿의 南下와 弁·辰韓 사회의 변화

기원전 1 세기를 전후하여 三韓文化의 중심지는 馬韓에서 弁·辰韓으로 변화한다. 이러한 원인으로 準王一派가 完州 萬頃江 일원(葛洞·新豐·德洞)에 머무르다가 大邱-慶山 일대로 이동하여 嶺南地方 瓦質土器文化가 시작되며, 이 이동의 여파로 粘土帶土器+韓國式銅劍+多鈕細紋鏡이 北部九州로 밀려난다는 견해가 일반적인 시각¹⁰이다. 嶺南地方의 三角形粘土帶土器와 韓國式銅劍·銅矛·銅戈 등의 유물 조합은 馬韓의 양상과 동일하며, 全國界鐵器도 일부 나타난다. 그러나 馬

⁶ 후한서동이열전에는 準王이 馬韓을 공격하였다는 표현이 있다. 그러나 후한서의 내용은 삼국지 위서동이전의 내용을 다수 차용하여, 후대에 윤색된 표현일 가능성이 높다. 『後漢書 東夷列傳』 “朝鮮王 準爲衛滿所破 乃將其餘衆數千人走入海 攻馬韓 破之 自立爲韓王”

⁷ 『三國志魏書東夷傳』 韓條, “準王海 中 不與朝鮮往來”

⁸ 中原文化財研究院, 2017, 『忠州 虎岩洞遺蹟』

⁹ 영남지방 다뉴세문경은 傳 慶州 入室里 收拾品이 알려져 있으나 破鏡의 일부이며, 출토 위치도 명확하지 않아 다뉴세문경의 중심 분포지로 판단하기 어렵다.

¹⁰ 신경철, 2013, 「삼한시대 문화와 울산」, 『삼한시대 문화와 울산』, 울산문화재연구원

韓과 弁·辰韓지역의 고고자료에서는 몇 가지 차이점이 간취된다. 우선, 馬韓 지배집단의 중요 위 제품인 多鈕細紋鏡이 嶺南地方에서 거의 출토되지 않는다. 또한, 嶺南地方에서는 粘土帶土器文化가 日常土器文化로 유지되는 가운데 새로운 瓦質土器文化가 전개된다. 이러한 사실은 原住民들의 粘土帶土器文化圈에 移住民들이 편입되면서 이루어진 것이다. 弁·辰韓지역에서 全國界鐵器도 확인되지만 이와 더불어 새로운 漢式鐵器가 나타나며, 漢式靑銅器도 등장한다. 마지막으로 기원전 2세기 후반~1세기 전반경에 粘土帶土器文化와 鐵器文化가 日本으로 과급된다는 견해는 彌生年代觀과도 맞지 않다. 圓形粘土帶土器를 비롯하여 多鈕細紋鏡·韓國式銅劍·銅矛·銅戈와 鐵器는 후쿠오카를 비롯한 北部九州 일대에서 彌生中期初頭부터 등장한다.

馬韓의 三韓文化가 이 시점에 단절되는 현상은 새로운 文化변동을 일으킬 계기를 만들지 못하고 정체되는 현상으로 생각된다. 新製陶術을 갖추고 古朝鮮靑銅器文化와 燕界鐵器 및 漢式鐵器를 지닌 移住民집단은 영남지역으로 移住하여 弁·辰韓 사회를 변화시켰을 가능성에 주목해 본다. 『三國志魏書東夷傳』 韓條에 등장하는 “歷谿卿의 南下” 記事는 이러한 가능성을 시사한다. 朝鮮相 歷谿卿은 古朝鮮 고위직으로 추정되며, 右渠王과의 갈등으로 인하여, 2,000 여호를 거느리고 辰國으로 南下하였다고 전한다. 이 시점은 右渠王과 漢武帝 간의 전쟁이 발발하기 이전으로, 기원전 2세기 후엽경으로 판단된다. 衛滿朝鮮은 古朝鮮界靑銅器와 燕界鐵器技術을 지니고 있었던 것은 분명하며, 燕界製陶術도 습득하였을 것이다. 이러한 歷谿卿의 南下로 인하여 弁·辰韓 지역에 새로운 製陶術과 全國界鐵器가 등장한 것으로 보인다. 移住民 입장에서 原住民과의 마찰을 줄이며, 弁·辰韓과 동화되어 나간 것으로 판단된다. 『三國史記』, 제 1권 新羅本紀 제 1始祖 赫居世 居西干條¹¹에는 「이보다 앞서 朝鮮流民이 산과 골짜기 사이에 살았으며, 이것이 六村이 되었다」란 記事가 확인되는데, 여기서 언급된 朝鮮流民은 歷谿卿 一派로 생각된다.

한편, 中國界 移住民이 嶺南地方으로 직접 이주하였을 가능성을 보여주는 기록도 있다. 『三國志魏書東夷傳』 辰韓條에 따르면 “옛날 秦나라의 부역을 피하여 도망친 사람들이 韓國으로 오니 馬韓에서는 동쪽 경계의 땅을 주었다.”란 기록¹²으로 미루어, 馬韓을 거쳐 辰韓으로 이동하였을 가능성이 보인다. 이와 더불어 辰韓인이 진한의 樂浪人을 일컬어 “阿殘”이라 불렀던 기록도 참고¹³가 된다. 낙랑군 유민이 남하한 사실을 적시한 것으로 생각되며, 中原人과 古朝鮮인이 뒤섞인 流民의 조합을 생각해 볼 수 있다.

Ⅲ. 漢郡縣과 三韓의 對外關係

『三國志魏書東夷傳』 韓條에는 漢郡縣과 관련된 사건의 비중이 높다. 중국인의 시각에서 쓴 史實이므로, 漢郡縣과의 關屬이나 朝貢에 대한 이야기가 등장한다. 그렇지만 漢郡縣과 韓은 일상적으로 敵對關係에 놓여 있었던 것으로 보인다.

朝貢에 대한 부분을 살펴보면, “(韓은) 樂浪郡에 속하며 季節마다 조알하였다.”는 記事¹⁴가 있다. 구체적인 朝貢 내용을 알 수 없지만, 『三國志魏書東夷傳』 倭人條에는 朝貢에 대한 기록이 있어 참고가 된다. (표 2)

¹¹ 『三國史記』 卷第一 新羅本紀 第一, “先是, 朝鮮遺民分居山谷之間, 爲六村”

¹² 『三國志魏書東夷傳』 辰韓條, “自言古之亡人避秦役 來適韓國, 馬韓割其東界地與之.”

¹³ 『三國志魏書東夷傳』 辰韓條, “名樂浪人爲阿殘 東方人名我爲阿, 謂樂浪人本其殘餘人. 今有名之爲秦韓者.”

¹⁴ 『三國志魏書東夷傳』 韓條, “漢時屬樂浪郡, 四時朝謁”

原文	
1	景初二年六月，倭女王遣大夫難升米等詣郡，求詣天子朝獻，太守劉夏遣吏將送詣京都。其年十二月，詔書報倭女王曰：「制詔親魏倭王卑彌呼，帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米。次使都市牛利奉汝所獻男生口四人，女生口六人。班布二匹二丈，以到。汝所在踰遠，乃遣使貢獻，是汝之忠孝，我甚哀汝。今以汝爲親魏倭王，假金印紫綬，裝封付帶方太守假授汝。其綬撫種人，勉爲孝順。汝來使難升米·牛利涉遠，道路勤勞，今以難升米爲率善中郎將，牛利爲率善校尉，假銀印青綬，引見勞賜遣還。今以絳地交龍錦五匹·絳地縹粟罽十張·蒨絳五十匹·紺青五十匹，答汝所獻貢直。又特賜汝紺地句文錦三匹·細班華罽五張·白絹五十匹·金八兩·五尺刀二口·銅鏡百枚·眞珠·鉛丹各五十斤，皆裝封付難升米·牛利還到錄受。悉可以示汝國中人，使知國家哀汝，故鄭重賜汝好物也。」
2	正始元年，太守弓遵遣建中校尉梯儁等奉詔書印綬詣倭國，拜假倭王，并齋詔賜金·帛·錦罽·刀·鏡·采物，倭王因使上表答謝恩詔。其四年，倭王復遣使大夫伊聲耆·掖邪狗等八人，上獻生口·倭錦·絳青縑·緜衣·帛布·丹木·狝·短弓矢。掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬。其六年，詔賜倭難升米黃幢，付郡假授。其八年，太守王頎到官。倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和，遣倭載斯·烏越等詣郡說相攻擊狀。遣塞曹掾史張政等因齋詔書·黃幢，拜假難升米爲告諭之。

표 2. 『三國志魏書東夷傳』 倭人條 朝貢 關聯 記事

表 2. 『三國志魏書東夷傳』 倭人條朝貢關連記事

倭는 帶方郡을 통해 漢과 직접 朝貢關係를 맺은 것으로 보이며, 漢은 倭王의 칭호를 하사하고 印綬를 賜與한다. 朝貢에서 눈에 띄는 특징은 사례품의 규모이다. 漢은 倭의 進上品에 대비하여 막대한 양의 下賜품을 내리고 있다. (표 2-1) 이와 마찬가지로 韓의 諸國에게도 進上品을 받아들이고, 막대한 양의 下賜품을 내렸을 가능성이 높다. 漢은 韓의 臣智들에게 印綬와 衣幘을 賜與하거나 下戶들까지 衣幘을 입고 朝謁하였다는 기록, 衣幘과 印綬를 지닌 자가 千餘人에 달하였다는 기록¹⁵은 막대한 下賜품을 내린 결과로 판단된다. 倭人條에는 景初 2년(238년)부터 正始 8년(247년)까지 10년간 2~3년 간격으로 총 5회에 걸친 朝貢 사례가 기록되어 있다. (표 2-2) 그러나 韓은 매년 季節마다 조알하였다는 것으로 미루어 朝貢은 수시로 이루어졌을 것이다. 『三國志魏書東夷傳』에 기록된 馬韓 54국, 辰韓 12국, 弁韓 12국이 수시로 朝貢을 행한다면, 漢의 입장에서 상당한 財政 부담을 질 수밖에 없다. 그러나 漢이 재정 부담을 안으며, 朝貢·冊封關係를 유지하는 이유는 중국 중심의 동아시아 질서를 유지하기 위한 정책적 노력의 일환이다. 대외로 수많은 이민족에 둘러싸인 漢의 입장에서 지속적인 강압책보다 우화책을 우선시한 것으로 보이며, 특히 漢郡縣과 국경을 맞대고 있는 三韓의 안정은 필수적으로 요구된다. 그러나 漢의 노력에도 불구하고 『三國志魏書東夷傳』 韓條에서는 漢郡縣과 三韓의 갈등 및 충돌 양상이 확인된다.

그 중 하나는 廉斯鑄 記事 (표 3-1) 이다. 辰韓의 右渠帥인 염사치는 낙랑군에 투항하기로 작정하고 가던 중, 韓의 노예가 된 漢人 戶來를 만나 귀순하게 되고, 낙랑군의 군세를 빌려 辰韓으로 가 1000명의 漢人 노예를 해방시키고, 죽은 노예 500인에 대한 대가로 辰韓 사람 만오천명과 弁韓布 만오천필을 거두어 돌아갔다는 내용이다. 記事의 내용으로 미루어 염사치와 辰韓 사이에 직접적 전투가 발생한 것은 아니지만, 낙랑군과 辰韓의 갈등을 보여주는 내용이다. 漢의 주민이 노예로 전락한 사례에서 낙랑군은 辰韓으로부터 공격을 받았다는 사실을 보여주며, 공격에 대한 낙랑군의 대응은 이루어지지 않았던 것으로 보인다. 辰韓으로부터 과도한 대가를 거두어들인 염사치의 행위는 과장된 면이 있지만, 戰功을 인정받아 역사서에 기록되었다는 사실은 주목된다.

¹⁵ 『三國志魏書東夷傳』 韓條, “諸韓國臣智加賜邑君印綬, 其次與邑長. 其俗好衣幘, 下戶詣郡朝謁, 皆假衣幘, 自服印綬衣幘千有餘人.”

原文	
1	至王莽地皇時，廉斯鑛爲辰韓右渠帥，聞樂浪土地美，人民饒樂，亡欲來降。出其邑落，見田中驅雀男子一人，其語非韓人。問之，男子曰：我等漢人，名戶來，我等輩千五百人伐材木，爲韓所擊得，皆斷髮爲奴，積三年矣。鑛曰：我當降漢，樂浪，汝欲去不。戶來曰：可。辰鑛因將戶來(來)出詣含資縣，縣言郡，郡卽以鑛爲譯，從莽中乘大船入辰韓，逆取戶來。降伴輩尙得千人，其五百人已死。鑛時曉謂辰韓：汝還五百人。若不者，樂浪當遣萬兵乘船來擊汝。辰韓曰：五百人已死，我當出贖直耳。乃出辰韓萬五千人，弁韓布萬五千匹，鑛收取直還。郡表鑛功義，賜冠幘·田宅，子孫數世，至安帝 延光四年時，故受復除。
2	建安中，公孫康分屯有縣以南荒地爲帶方郡，遣公孫模·張敞等收集遺民，興兵伐韓濊，舊民稍出，是後倭韓遂屬帶方。
3	景初中，明帝密遣帶方太守劉昕·樂浪太守鮮于嗣越海定二郡。部從事吳林以樂浪本統韓國，分割辰韓八國以與樂浪，吏譯轉有異同，臣智激韓忿，攻帶方郡崎離營。時太守弓遵·樂浪太守劉茂興兵伐之，遵戰死，二郡遂滅韓。

표 3. 漢과 韓의 衝突 關聯 記事 (『三國志魏書東夷傳』 韓條)

表 3. 漢と韓の衝突關連記事 (『三國志魏書東夷傳』 韓條)

다음은 建安 年間 (196~220) 에 공손강이 帶方郡을 설치한 記事 (표 3-2) 이다. 공손모와 장창은 군대를 일으켜 韓과 濊를 정벌하였고, 이에 倭와 韓이 대방에 복속되었다는 내용이다. 이에 앞서 후한의 환제와 영제 말기에 韓과 濊가 강성해져 군현에서 제대로 통제가 되지 않았다는 記事¹⁶ 가 있다. 후한 말기 한군현의 위세는 후한의 국력처럼 약화된 상태였을 것이고, 과거와 같은 朝貢·冊封 관계가 유지되기 어려웠을 것이다. 따라서 건안 연간에 이루어진 대방군의 정벌은 韓과 濊에 대한 전 방위적인 토벌은 납득하기 어렵다. 신설된 군현 내부를 결속시키고 국경을 안정시키는 노력이 필요하기 때문이다. 공손강이 둔유현 이남 황무지에 대방군을 설치하였다고 하나, 이곳은 三韓의 原住民이 거주하던 곳일 가능성이 높으며, 재지민의 반발이 따라왔을 것이다. 따라서 대방군 부근의 삼한 소국을 대상으로 국지전 형태의 토벌이 이루어졌을 것으로 본다. 韓과 濊를 토벌하였는데, 倭와 韓이 복속되었다는 의미는 한군현이 무력 일부를 과시하자, 뒤 이어 倭와 삼한 소국들의 朝貢이 이루어졌다고 볼 수 있다.

세 번째 記事는 景初 年間 (237~239) 에 위나라 明帝가 대방태수 유흔과 낙랑태수 선우사를 파견하여, 한국의 신지들에게 읍군의 칭호와 인수를 사여하는 등 朝貢관계를 회복한 모습을 보여주기도 한다. (표 3-3) 인수와 의책을 착용한 자가 천여명에 달한다는 사실은 한군현의 朝貢에 대한 경제적 부담은 상승하지만, 朝貢 질서가 원만하게 유지되었다고 볼 수 있다. 그런데 뒤 이어 韓國의 臣智들이 대방군의 崎離營을 공격하는 사건이 일어난다. 部從事 吳林이 辰韓八國을 분할하여 낙랑에 편입시키려 하였고, 통역하는 관리가 말을 옮기는 과정에서 틀리게 설명하는 바람에 臣智와 韓人들이 격분하여 帶方郡 崎離營을 공격하였다고 전한다. 이에 대방태수 궁준과 낙랑태수 유무가 군사를 일으켜 崎離營 전투에 참여하나 대방태수 궁준은 전사하고 만다. 『三國志魏書東夷傳』 韓條에는 대방과 낙랑군이 승리하였다고 기록하고 있으나 역시 중국 사관의 입장이 반영되었다고 보인다. 기리영사건의 시점은 『三國史記』 백제본기 고이왕 13년 (246) 記事¹⁷ 에서 찾을 수 있다. (고이왕 13년) 가을 8월에 위의 유주자사 관구검이 낙랑태수 유무와 삭방태수 왕준¹⁸ 과 함께 고구려를 공격하자, (고이) 왕은 좌장 진충을 보내 낙랑의 변방을 토벌하였다. 유무가 이를 전해 듣고 노

¹⁶ 『三國志魏書東夷傳』 韓條, “桓·靈之末, 韓濊彊盛, 郡縣不能制.”

¹⁷ 『三國史記』, 卷第二十四 百濟本紀 第二, “秋八月, 魏幽州刺史毋丘儉與樂浪大守劉茂·朔方大守王遵, 伐高句麗, 王乘虛, 遣左將真忠, 襲取樂浪邊民. 茂聞之怒. 王恐見侵討, 還其民口.”

¹⁸ 朔方大守 王遵은 『三國志魏書東夷傳』 韓條에 보이는 帶方太守 弓遵과 동일한 인물로 추정된다.

하자, (고이) 왕이 침입받을까 두려워 잡아온 사람을 돌려보냈다고 한다. 『三國志魏書東夷傳』의 기리영전투와 백제의 좌장 진중이 일으킨 낙랑 변방 토벌이 동일한 사건인지는 불명확하다. 『三國志魏書東夷傳』倭人條에는 正始 8년 (247) 태수 왕기가 부임하는 사실이 적시되어 있으므로, 궁준은 기리영 전투에서 사망한 것으로 보이므로, 기리영 전투는 246~247년 사이에 벌어진 것으로 생각된다. 기리영 전투의 원인이 통역의 실수로 인해 발생한다는 사실은 쉽게 납득되지 않는다. 正始 5년 (244) 유주자사 관구검과 고구려 동천왕의 전쟁이 시작된 이후 正始 6년 (245) 동천왕이 수도를 포기하고 달아날 정도로 위나라의 위세가 절정에 달하는 시점이었다. 따라서 기리영 전투는 한군현이 辰韓을 직접 세력권에 넣으려는 시도를 하였고 이러한 과정에서 발생한 전투로 생각된다.

이와 같이 『三國志魏書東夷傳』에는 중국 중심의 사관이 강하게 반영되어, 三韓과의 전투에서 漢이 승리하는 記事로 표현되어 있지만, 한군현은 여러 한국과의 전투로 고역을 겪었을 것으로 보인다. 이에 한국을 朝貢·冊封 질서에 편입시키는 유화책과 국지적 전투를 통한 강경책을 통해 한군현을 유지시켰을 것이다. 이와 반대로 倭는 한군현과 朝貢·冊封을 통해 원만한 관계를 유지하였던 것으로 보이며, 이 과정에서 얻은 경제적 이득이나 신문물은 倭國 통치자의 위상을 상승시켜 주었을 것이다.

고대 사회에서 나라 간의 경제적 교류나 교역은 통치자의 권력을 강화시키는 한 방안이다. 이와 관련하여, 『三國志魏書東夷傳』 弁辰條에는 교역의 중심지로 弁辰을 지목하고 있다. “나라에서 철이 생산되는데 韓·濊·倭人이 모두 와서 사가며, 시장에서 모든 매매는 철로 이루어져 마치 중국에서 돈을 쓰는 것과 같다. 또한 (낙랑·대방) 2군에도 공급하였다.” 고 전한다¹⁹. 弁韓은 철의 산지로 각광받으며 한반도 일원과 한군현, 일본까지 철을 공급한 중심지임을 알 수 있다. 많은 연구자들은 ‘國出鐵’ 교역 記事의 주 무대를 사천 늑도로 상정하고 있다. 그러나 사천 늑도에서 이루어진 國際交易은 야요이시대 중기 20에 해당하며, 彌生人の 이주가 가능한 자유로운 교역이 이루어지던 시점으로, 적극적인 철 교역의 흔적은 찾을 수는 없다. ‘國出鐵’ 記事에 등장하는 2군은 낙랑군과 대방군을 가리키므로, 대방군이 성립한 3세기 이후의 사실로 보는 것이 타당하다. 이 시점을 전후하여 韓半島 南部에서 日本産과 中國産 위세품이 동시에 확인되는 유일한 지역은 김해이다. 또한, 무덤 내에 다량의 鐵器를 매납하는 시기이기도 하다. 3세기대 國際교역의 중심지이자 ‘國出鐵’ 記事에 등장하는 주 무대는 김해로 보아야 하지 않을까 생각해 본다.

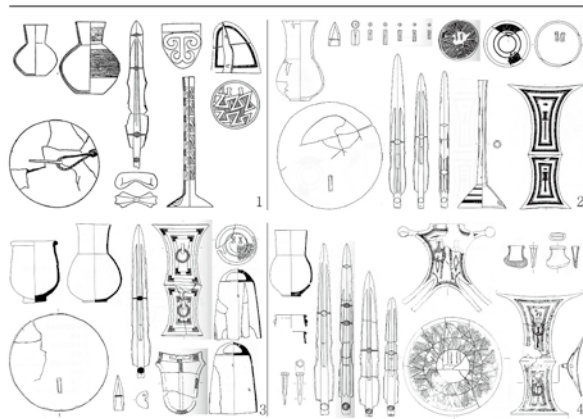
IV. 맺음말

『三國志魏書東夷傳』 세계의 시점은 3세기 후반 경으로 생각되지만, 기원전 2세기 초에 해당하는 고조선 준왕 관련 기사나 그보다 훨씬 이전인 연나라 진개의 원정, 조선 부왕의 존재 등 다소 시간적인 혼란을 가져오기도 한다. 실견한 내용을 기술한 것이 아니어서 신화적인 내용이나 거짓, 과장된 내용도 관찰된다. 그러나 중국 외 동아시아 지역의 문화와 풍속, 제도 등을 당대에 기록한 유일한 사서이다. 위만조선의 성립과 준왕의 남하, 조선상 역계경의 남하, 고조선의 멸망과 漢 혼란기에 따른 유민의 남하 등은 동아시아 국제 정세를 뒤바꾸는 중요한 사건으로 실제 일어난 사실을 기록하였을 것이다. 일련의 사건은 한반도 남부 사회에 영향을 주어 물질문화의 변동을 가져오게 되며, 역사적으로 중요한 분수령이 되었다. 선

¹⁹ 『三國志魏書東夷傳』 弁辰條, “國出鐵, 韓·濊·倭皆從取之. 諸市買皆用鐵, 如中國用錢, 又以供給二郡”

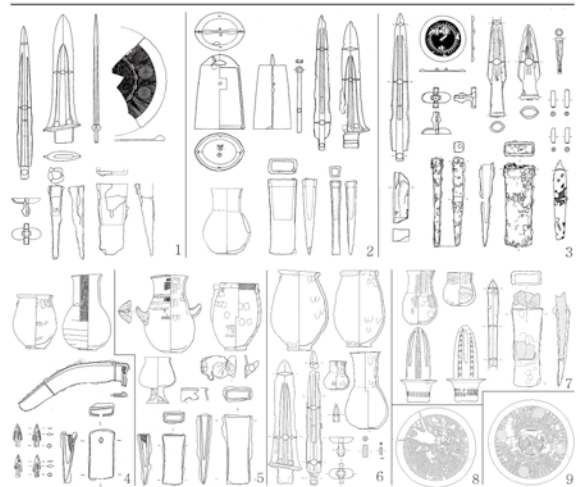
²⁰ 武末純一, 2012, 「原三國時代 年代論の諸問題 — 北部九州の資料を中心に —」, 『原三國・三國時代 歷年代論』, 학연문화사

진문물을 빠르게 수용한 삼한 신지들이나 외래 이주민집단은 성장세가 두드러졌을 것이다. 삼한 신지들은 전쟁·연합·동맹·흡수·소멸과정을 지속적으로 거치며, 그 과정에서 구야국·사로국·백제국은 삼국의 맹주로 성장하게 되었을 것이다.



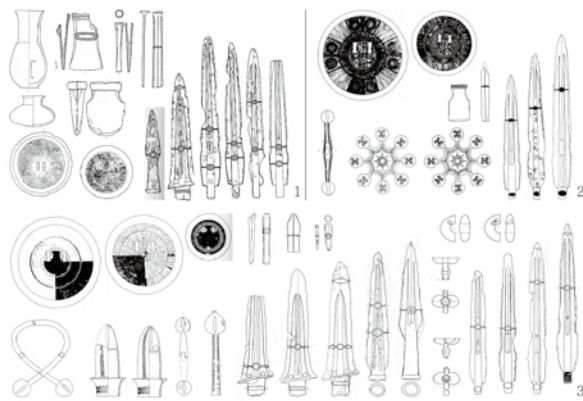
1: 瀋陽 鄭家窪子 6512号, 2: 禮山 東西里, 3: 大田 槐亭洞, 4: 牙山 南城里

圖面 1. 圓形粘土帶土器文化와 異形青銅器의 出現
 図面 1. 円形粘土帶土器文化と異形青銅器の出現



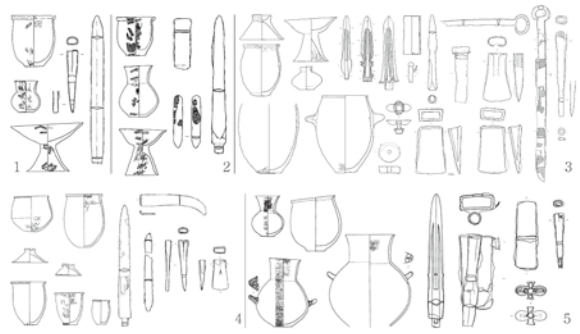
1: 唐津 素素里, 2: 扶餘 合松里, 3: 長水 南陽里 4号, 4: 完州 葛洞 3号, 5: 完州 葛洞 4号, 6: 完州 新豐 53号, 7: 完州 新豐 54号, 8: 完州 新豐 43号, 9: 完州 新豐 35号

圖面 3. 圓形粘土帶土器文化와 鐵器의 出現
 図面 3. 円形粘土帶土器文化と鐵器の出現



1: 扶餘 九鳳里, 2: 和順 大谷里, 3: 咸平 草浦里

圖面 2. 圓形粘土帶土器文化와 銅鈴類青銅器의 出現
 図面 2. 円形粘土帶土器文化と銅鈴類青銅器の出現



1: 大邱 月城洞 1-2号, 2: 大邱 月城洞 1-6号, 3: 蔚山 校洞里 1号, 4: 大邱 八達洞 30号, 5: 大邱 八達洞 45号

圖面 4. 弁辰韓 三角形粘土帶土器文化와 鐵器 初現期
 図面 4. 弁辰韓 三角形粘土帶土器文化と鐵器 初現期

참고문헌

- 『삼국사기 (三國史記)』
- 『사기 (史記)』
- 『삼국지 (三國志)』
- 『후한서 (後漢書)』

權五榮, 1996, 『三韓의 國에 대한 研究』, 서울大學校 博士學位論文
 한국고고학회, 2010, 『한국고고학강의』, 사회평론
 宮里修, 2010, 『한반도 청동기의 기원과 전개』, 사회평론
 武末純一, 2012, 「原三國時代 年代論의 諸問題 —北部九州の資料を中心—」, 『原三國 · 三國時代 歷年代論』, 학연문화사
 신경철, 2013, 「삼한시대 문화와 울산」, 『삼한시대 문화와 울산』, 울산문화재연구원
 朴辰一, 2013, 『韓半島 粘土帶土器文化 研究』,釜山大學校 博士學位論文
 安海成, 2016, 「三韓時代韓半島土器文化의 展開と韓日交流の一側面」, 『大海を渡り 一支國に在る』, 東アジア國際シンポジウム, 長岐縣埋藏文化財センター
 中原文化財研究院, 2017, 『忠州 虎岩洞遺蹟』
 성정용, 2018, 「마한의 시간과 공간」, 『마한고고학개론』, 진인진

三韓時代韓半島南部と東アジア社会の変動 —『三国志魏書東夷伝』韓・辰韓・弁辰条を中心に—

釜山博物館 安 海成

I . はじめに

『三国志魏書東夷伝』は西晋の陳寿(233～297)が太康年間(280～289)に著述した『三国志魏書』第30巻に収録された『烏丸鮮卑東夷列伝』のうち東夷に関する部分を意味する。構成は序文をはじめに、鮮卑・夫餘・高句麗・東沃沮・挹婁・濊・韓・(州胡)・辰韓・弁辰・倭の順序で続く。『三国志魏書東夷伝』は3世紀後半東アジア古代社会の生活相を最初に記録した史書という点と同時代に記録された唯一の史書という点で高い評価を受けている。しかし、史書の記述は中国人の観点から東アジアを皮相的に眺め、内容が貧弱で、批判的な視角でみる必要がある。本稿では『三国志魏書東夷伝』のうち三韓と関連する韓・辰韓・弁辰の記録を中心に古代韓半島南部と東アジア社会の一面を考古学的な成果とともに検討しようと思う。

II . 三韓の成立と韓半島南部地方物質文化の変動

韓国の初期鉄器-原三国時代に該当する時期の南部地方では三韓が成立していた。三韓は西側の馬韓、東側の辰韓、南側の弁韓にわかれる。『三国志魏書東夷伝』の三韓記録は韓・辰韓・弁辰に区分されるが、叙述する過程をみると、一つの国と認識される傾向がみられる。記録の大部分は韓条に重きを置いて叙述され、辰韓条と弁辰条は疎略なさいがある。韓条のはじめには韓の構成と位置についての内容があらわれ、続いて韓と漢郡県間の事件関連記事が主をなす。最後に韓の風俗と制度についての内容が簡略に扱われる。

『三国志魏書東夷伝』韓条には韓の成立を仔細に扱っている。その時点は衛満により古朝鮮から追い出された準王の南下に求めている。“侯準が王と称したが、燕国の亡人衛満に攻撃を受け国を脱した。彼は左右将軍と宮人を連れて、海を越えて韓に住み着き自ら韓王と称した。魏略に曰く、彼の子孫は国に残ってそのまま韓氏姓を使用した。準は海外で王となって以降、朝鮮と往来しなかった。その後、絶滅してしまったが、今、韓人の中にはなお彼の祭祀を信奉する人がいる。”と記録¹されている。『三国志魏書東夷伝』に記録された韓王を自任した準王の登場時点を韓の成立とみている。この時点はB.C.194～180年の間で紀元前2世紀前葉頃²である。しかし辰王が馬韓の月支国を統治するという記録³と弁韓と辰韓の12国が辰王に臣属しているという記録⁴をみると、三韓はそれ以前から成立していたとみるのが妥当である。そして韓半島南部地域は準王の南下を基点に三韓の先住民と古朝鮮から出てきた移住民は同じ時期に存在したと考えられる。本稿では三韓の成立時点と準王の南下による文化変動を考古学的指標を通して検討する。

¹ 『三国志魏書東夷伝』 韓條, “侯準既僭號稱王, 爲燕亡人衛滿所攻奪, 將其左右宮人走入海, 居韓地, 自號韓王。魏略曰其子及親留在國者, 因冒姓韓氏。準王海中, 不與朝鮮相往來。其後絶滅, 今韓人猶有奉其祭祀者。”

² 『三国志魏書東夷伝』 韓條には準王の南下の時期が摘示されておらず、『史記 朝鮮列伝』には孝惠高后(B.C.195～180)年間とされており、『三国史記』にはB.C.194年と記録された。後代の記録は『史記』の内容を潤色した可能性がある。

³ 『三国志魏書東夷伝』 韓條, “辰王治月支國”

⁴ 『三国志魏書東夷伝』 韓條, “其十二國屬辰王 辰王常用馬韓人作之”

1. 三韓の成立

三韓社会成立の考古学的指標は円形粘土帯土器とともに韓国式銅剣・多鈕粗文鏡など階層社会の面貌をみせる新たな威信財の登場の時点を考えることができる。円形粘土帯土器文化は外来系土器文化が土着化していく基層文化として初期鉄器時代の間、持続的に存続し、韓国式銅剣・多鈕粗文鏡をはじめとして剣把形銅器・円蓋形銅器・喇叭形銅器など異形青銅器が新たに登場する。韓半島中西部地域に登場する異形青銅器は、その祖形を瀋陽鄭家窪子遺跡に求めることができる。多鈕雷文鏡 + 遼寧式銅剣 + 円蓋形銅器 + 防牌形銅器 + 喇叭形銅器で構成されている鄭家窪子 6512 号墓の青銅器の組み合わせは古朝鮮の祭器の組み合わせであると推定される。このような祭器の組み合わせは大田槐亭洞・牙山南城里・礼山東西里で確認されるが、登場時点は韓国式銅剣と多鈕粗文鏡を基準とすると鄭家窪子 6512 号墓より遅い段階である。瀋陽鄭家窪子 6512 号墓の年代を紀元前 4 世紀後半と提示した宮里修⁵は韓半島中西部地域の異形青銅器の組み合わせの登場時点も同一であるとみている。しかし遼寧式銅剣 + 雷文鏡の組み合わせより韓国式銅剣 + 多鈕粗文鏡の組み合わせの型式学的段階は時間の差異を反映したもので、鄭家窪子遺跡の年代よりは遅い時点に登場したものと判断される。韓半島南部粘土帯土器文化と韓国式銅剣文化は新たな文化変動を引き起こし、青銅器時代の松菊里文化を終了させる。このような文化変動の時点を三韓社会の成立段階とみることができる。

2. 準王の南下と馬韓社会の変化

準王一派が韓半島南下をはじめた時点は衛満の朝鮮攻奪により始まり、この時点は B.C.194 ~ 180 年間の事件で、紀元前 2 世紀前葉頃である。朝鮮から海を越え“韓王”と称したが、‘韓’というところは韓半島南部であり、三韓前期文化の中心地である中西部地域とみるのが一般的である。新文物を備えた準王一派は韓半島南部社会に物質文化変動を引き起こし、このような物質文化の波及経路は海路に沿ってなされた傾向をみせる。新たな物質文化の変動としては、銅鏡は粗文鏡から細文鏡に発達し、青銅器は異形青銅器・銅鈴など儀器中心の構成から銅矛・銅戈のような武器や銅斧・銅鑿・銅ヤリガンナのような実用品中心に転換した。後には韓半島に鉄器が初めて現れ、青銅実用品は漸次、鉄器に代替される。

韓国式銅剣文化の変化は三韓先住民たちの主導的な文化変動と考えられ、鉄器文化の初現は移住民に該当する準王の南下によって登場したものと考えられる。この時点の新文化は土着文化を破壊せず、同化されていく特徴をみせる。新たな鉄器文化は青銅器文化にも影響を与え、青銅製実用品は漸次、鉄器に転換される。しかし、基層的な粘土帯土器文化や韓国式銅剣文化は依然、維持される。既存の韓国式銅剣文化に鉄器を受け入れて新たな三韓文化に転換したのである。『三国志魏書東夷伝』には三韓の統治者を“辰王”と表現し、準王は“韓王”を自称した。先住民の統治者である“辰王”と移住民の“韓王”は馬韓一帯で一定期間共存したのである。準王一派が南下し、馬韓を攻撃し、国を建てた可能性⁶もある。しかしこの時期の馬韓は諸小国で構成される。準王一派は新たな基盤を得るためにいくつかの小国と局地的な戦闘をはじめた可能性があるが、馬韓全体についての討伐を敢行する意志はなかったのである。移住民が馬韓の文化を破壊したり、代替する現象はみられないためである。このように先住民と移住民は互いに衝突せず文化交流をして共存したものとみられる。

⁵ 宮里修, 2010, 『한반도 청동기의 기원과 전개』, 사회평론

⁶ 後漢書東夷列伝には準王が馬韓を攻撃したという表現がある。しかし後漢書の内容は三国志魏書東夷伝の内容を多数借用し潤色した可能性が高い。『後漢書 東夷列傳』 “朝鮮王 準爲衛滿所破 乃將其餘衆數千人走入海 攻馬韓 破之自立爲韓王”

準王は海を越えた後、朝鮮と往来せず、王を自任する程度の勢力を維持した⁷。巨大な勢力が海を越え、一派をなす程度であれば、準王一派は相当な規模の海上船団を率いた可能性が高い。このような海上船団を利用し、韓半島南部海岸一帯の文化をいち早く変化させていったのである。韓国式銅剣文化と新たな鉄器文化に代表される三韓文化は海路に沿って湖西-湖南地方を経て移動し、北部九州まで到達したものと考えられる。日本の北部九州で板付Ⅱcまたは城ノ越段階から円形粘土帯土器-韓国式銅剣-多鈕細文鏡-鉄器文化が登場する経緯と無関係ではなく、結局弥生時代中期に転換する契機をつくったものとみられる。最近、忠州虎岩洞遺跡1号積石木棺墓で細形銅剣7点と多鈕細文鏡破鏡1点、銅斧・銅鑿・銅ヤリガンナの組み合わせが出土⁸した。このような文化様相は馬韓の特徴的な青銅器の組み合わせで、韓半島南部内陸まで馬韓の文化要素が確認されたものと思われ、馬韓小国の領域が相当に広がったことを示唆する。一方、このような文化伝播経路から辰韓と弁韓に該当する嶺南海岸一帯が排除される。準王一派が保有する多鈕細文鏡⁹と鉄器文化がみられないためである。

結論的に準王一派のうち一部は馬韓地方に定着したのであるが、先住民と妥協による定着であった可能性が高い。在地の粘土帯土器文化を受容し、先進集団は戦国系鉄器文化を持ってきた。『三国志魏書東夷伝』に‘準王一派が絶滅した’という記事から推測して、準王一派と推定される集団は馬韓地方で一次的に留まり、消滅したり融和されたものと判断される。

3. 歴谿卿の南下と弁・辰韓社会の変化

紀元前1世紀を前後し、三韓文化の中心地は馬韓から弁・辰韓に変化する。このような原因として準王一派が完州万頃江一円(葛洞・新豊・徳洞)に留まったが、大邱-慶山一帯に移動し、嶺南地方瓦質土器文化が始まり、この移動の余波で粘土帯土器+韓国式銅剣+多鈕細文鏡が北部九州に押し出されたという見解が一般的な視角¹⁰である。嶺南地方の三角形粘土帯土器と韓国式銅剣・銅矛・銅戈などの遺物の組み合わせは馬韓の様相と同一で、戦国系鉄器の一部現れる。しかし馬韓と弁・辰韓地域の考古資料ではいくつかの差異点が看取される。まず、馬韓支配集団の主要威信財である多鈕細文鏡が嶺南地方でほとんど出土しない。また、嶺南地方では粘土帯土器文化が日常土器文化として維持される中、新たな瓦質土器文化が展開する。このような事実は先住民の粘土帯土器文化圏に移住民が編入されながらなされたものである。弁・辰韓地域で戦国系鉄器も確認されるが、これとともに新たな漢式鉄器が現われ、漢式青銅器も登場する。最後に紀元前2世紀後半~1世紀前半頃に粘土帯土器文化と鉄器文化が日本に波及するという見解は弥生年代観とも合わない。円形粘土帯土器をはじめ多鈕細文鏡・韓国式銅剣・銅矛・銅戈と鉄器は福岡をはじめとした北部九州一帯で弥生中期初頭から登場する。

馬韓の三韓文化がこの時点で断絶する現象は新たな文化変動を引き起こす契機をつくることができず停滞する現象であると考えられる。新製陶術を備え古朝鮮青銅器文化と燕系鉄器及び漢式鉄器を持った移住民集団は嶺南地域に移住し、弁・辰韓社会を変化させた可能性に注目してみたい。『三国志魏書東夷伝』韓条に登場する“歴谿卿の南下”記事はこのような可能性を示唆する。朝鮮相歴谿卿は古朝鮮高位職と推定され、右渠王との葛藤により、2000余戸を率いて辰国に南下したと伝えられる。この時

⁷ 『三国志魏書東夷傳』 韓條, “準王海中 不與朝鮮往來”

⁸ 中原文化財研究院, 2017, 『忠州 虎岩洞遺蹟』

⁹ 嶺南地方多鈕細文鏡は伝慶州入室里収集品が知られているが、破鏡の一部で、出土位置も明確ではなく、多鈕細文鏡の中心分布地と判断するのは難しい。

¹⁰ 신경철, 2013, 『삼한시대 문화와 울산』, 『삼한시대 문화와 울산』, 울산문화재단연구원

点は右渠王と漢武帝間の戦争が勃発する前で、紀元前2世紀後葉頃と判断される。衛満朝鮮は古朝鮮系青銅器と燕系鉄器技術を持っていたことは明らかで、燕系製陶術と戦国系鉄器が登場したものとみられる。移住民の立場で先住民との摩擦を減らし、弁・辰韓と同化していったものと判断される。『三国史記』第1巻新羅本紀第1始祖赫居世居西干条¹¹には「これより先に朝鮮流民が山と谷の合間に住んで、六村をなす」という記事が確認されるが、ここで言及された朝鮮流民は歴谿卿一派であると考えられる。

一方、中国系移住民が嶺南地方に直接移住した可能性を示す記録もある。『三国志魏書東夷伝』辰韓条によると“昔、秦国の賦役を避け逃亡した人々が韓国にきて馬韓からは東側境界の土地をもらった。”という記録¹²から推察すると、馬韓を経て辰韓に移動した可能性がみられる。これとともに辰韓人が楽浪人を名づけて“阿残”と呼んだ記録も参考¹³となる。楽浪郡の流民が南下した事実を摘出したものと考えられ、中原人と古朝鮮人が混ざった流民の組み合わせを想定することができる。

Ⅲ. 漢郡県と三韓の対外関係

『三国志魏書東夷伝』韓条には漢郡県と関連した事件の比重が高い。中国人の視角で書かれた史実で、漢郡県との隷属や朝貢についての話が登場する。しかし、漢郡県と韓は日常的に敵対関係におかれていたものとみられる。

朝貢についての部分を検討すると、“（韓は）楽浪郡に属し、季節ごとに朝謁した。”という記事¹⁴がある。具体的な朝貢内容を知ることはできないが、『三国志魏書東夷伝』倭人条には朝貢についての記録があり参考となる（表2）。

倭は帯方郡を通して漢と直接朝貢関係を結んだものとみられ、漢は倭王の称号を下賜し、印綬を賜与した。朝貢で目を引く特徴は謝礼品の規模である。漢は倭の進上品に対比して莫大な量の下賜品を出している（表2-1）。これと同様に韓の諸国にも進上品を受け、莫大な量の下賜品を出した可能性が高い。漢は韓の臣智たちに印綬と衣幘を賜与したり、下戸までも衣幘を着て朝謁したという記録、衣幘と印綬を持った者が1000余人に達したという記録¹⁵は莫大な下賜品を出した結果と判断される。倭人条には景初2年（238年）から正始8年（247年）まで10年間に2～3年間隔で、総5回にわたって朝貢事例が記録されている（表2-2）。しかし韓は毎年季節ごと朝謁したということから推察すると朝貢は随時なされたのである。『三国志魏書東夷伝』に記録された馬韓54国、辰韓12国、弁韓12国が随時朝貢を行ったとすると、漢の立場では相当な財政負担を負うほかない。しかし、漢が財政負担を負い、朝貢・冊封関係を維持する理由は中国中心の東アジア秩序を維持するための政策的努力の一環であるからである。対外的に数多くの異民族に囲まれた漢の立場では持続的な強圧策より融和策を優先視したものとみられ、特に漢郡県と国境を接している三韓の安定は必須的に要求される。しかし漢の努力にもかかわらず、『三国志魏書東夷伝』韓条では漢郡県と三韓の葛藤および衝突の様相が確認される。

その中の一つが廉斯鏞の記事（表2-1）である。辰韓の右渠帥である廉斯鏞は楽浪郡に投降するつ

¹¹ 『三国史記』 卷第一 新羅本紀 第一, “先是, 朝鮮遺民分居山谷之間, 爲六村”

¹² 『三国志魏書東夷傳』 辰韓條, “自言古之亡人避秦役 來適韓國, 馬韓割其東界地與之。”

¹³ 『三国志魏書東夷傳』 辰韓條, “名樂浪人爲阿殘 東方人名我爲阿, 謂樂浪人本其殘餘人. 今有名之爲秦韓者。”

¹⁴ 『三国志魏書東夷傳』 韓條, “漢時屬樂浪郡, 四時朝謁”

¹⁵ 『三国志魏書東夷傳』 韓條, “諸韓國臣智加賜邑君印綬, 其次與邑長. 其俗好衣幘, 下戸詣郡朝謁, 皆假衣幘, 自服印綬衣幘千有餘人.”

もりで行く途中、韓の奴隷となっていた漢人戸来に会い、帰順するようになり、楽浪郡の軍勢を借りて辰韓に行き、1000余名の漢人奴隷を解放させ、死んだ奴隷500人については対価として辰韓人15000名と弁韓布15000匹を収めて帰っていったという内容である。記事の内容から推察し、廉斯鏞と辰韓の間に直接的な戦闘が発生したのではないが、楽浪郡と辰韓の葛藤を示す内容である。漢の住民が奴隷に転落した事例から楽浪郡は辰韓から攻撃を受けたという事実を示しており、攻撃に対して楽浪郡の対応はなされなかったものとみられる。辰韓から過度な対価を収めた廉斯鏞の行為は誇張された面があるが、戦功を認められ歴史書に記録されたという事実は注目される。

次は建安年間(196～220)に公孫康が帯方郡を設置した記事(表3-2)である。公孫模と張敞は軍隊を率いて韓と濊を征伐し、これに倭と韓が帯方に付属したという内容である。これに先立って後漢の桓帝と靈帝末期に韓と濊が強盛をほこり郡県でそのまま統制することができなくなったという記事¹⁶がある。後漢末期の韓郡県の威勢は後漢の国力のように弱化した状態で、過去のように朝貢・冊封関係が維持されるのが困難になったということである。従って建安年間になされた帯方郡の征伐は韓と濊に対する全方位的な討伐であったとは納得し難い。新設された郡県内部を結束させ国境を安定させるための努力が必要であるためである。公孫康が屯有県以南の荒蕪地に帯方郡を設置したというが、ここは三韓の先住民が居住していたところである可能性が高く、在地民の反発が伴ったのである。従って、帯方郡附近の三韓諸国を対象に局地的な形態の討伐がなされたものとみられる。韓と濊を討伐したが、倭と韓が付属したという意味は漢郡県が武力の一部を誇示し、相次いで倭と三韓小国の朝貢がなされたとみることができる。

三番目の記事は景初年間(237～239)に魏の明帝が帯方太守劉昕と楽浪太守鮮于嗣を派遣し、韓国の臣智たちに邑君の称号と印綬を賜与するなど朝貢関係を回復した姿をみせている(表3-3)。印綬と衣幘を着用した者が1000余名に達するという事実は漢郡県の朝貢についての経済的負担は上昇するが、朝貢秩序が円満に維持されたとみることができる。そうしたところ、相次いで韓国の臣智たちが帯方郡の崎離營を攻撃する事件が起きた。部從事呉林が辰韓八国を分割し、楽浪に編入させようとしたが、通訳する官吏が言葉を通訳する過程で間違えて説明した弾みで、臣智と韓人たちが激高して帯方郡崎離營を攻撃したと伝える。これに帯方太守弓遵と楽浪太守劉茂が軍隊を率いて崎離營戦闘に参加したが、帯方太守弓遵は戦死した。『三国志魏書東夷伝』韓条には帯方と楽浪郡が勝利したと記録されているが、やはり中国史官の立場が反映したものとみられる。崎離營事件の時点は『三国史記』百濟本紀古尔王13年(246)記事¹⁷にみつけることができる。(古尔王13年)秋8月に魏の幽州刺史母丘儉が楽浪太守劉茂と朔方太守王遵¹⁸とともに高句麗を攻撃し、(古尔)王は左将真忠を送り、楽浪の辺方を討伐した。劉茂がこれを伝え聞いて怒り、(古尔)王が侵入を受けるのではないかと恐れて、捕まえた人々を送り返したという。『三国志魏書東夷伝』の崎離營戦闘と百濟の左将真忠が率いた楽浪辺方討伐が同一事件であるかは不明確である。『三国志魏書東夷伝』倭人条には正始8年(247)太守王頎が赴任する事実が摘示されているが、弓遵は崎離營戦闘で死亡したものとみられ、崎離營戦闘は246～247年の間に起きたものと考えられる。崎離營戦闘の原因が通訳の失敗により発生するという事実は簡単に納得できない。正始5年(244)幽州刺史母丘儉と高句麗東川王の戦争が

¹⁶ 『三国志魏書東夷伝』韓條，“桓・靈之末，韓濊彊盛，郡縣不能制。”

¹⁷ 『三国史記』，卷第二十四 百濟本紀 第二，“秋八月，魏幽州刺史母丘儉與樂浪太守劉茂・朔方太守王遵，伐高句麗，王乘虛，遣左將真忠，襲取樂浪邊民，茂聞之怒，王恐見侵討，還其民口”

¹⁸ 朔方太守王遵は『三国志魏書東夷伝』韓條にみえる帯方太守弓遵と同一の人物であると推定される。

始まって以後、正始6年(245)東川王が首都を放棄し、逃げる程度、魏の威勢が絶頂に達する時点であった。従って崎離營戦闘は漢郡県が辰韓を直接勢力圏に入れようとする試図があり、このような過程で発生した戦闘であると考えられる。

このように『三国志魏書東夷伝』には中国中心の史観が強く反映され、三韓との戦闘で漢が勝利する記事として表現されているが、漢郡県は数次の韓国との戦闘で苦労を経たものとみられる。これに韓国を朝貢・冊封秩序に編入させる融和策と局地的戦闘を通じた強硬策を通して、漢郡県を維持したのである。これとは反対に、倭は漢郡県と朝貢・冊封を通して円満な関係を維持したようにみられ、この過程で得た経済的な利得や新文物は倭国統治者の威信を上昇させたのである。

古代社会で国家間の経済的交流や交易は統治者の権力を強化させる一つの手段である。これと関連し、『三国志魏書東夷伝』弁辰条では交易の中心地として弁辰に目をつけている。“国では鉄が生産されるが、韓・濊・倭人がみな来て買っていき、市場で全ての売買は鉄でなされ、あたかも中国で銭を使うようである。また(楽浪・帯方)二郡にも供給した”と伝える¹⁹。弁韓は鉄の産地として脚光を浴び、韓半島一円と漢郡県、日本まで鉄を供給した中心地であることを知ることができる。多くの研究者は‘国出鉄’交易記事の主舞台を泗川靺島と想定している。しかし、泗川靺島でなされた国際交易は弥生時代中期²⁰に該当し、弥生人の移住が可能な自由な交易がなされた頃のことで、積極的な鉄交易の痕跡はみつけることができない。‘国出鉄’記事に登場する二郡は楽浪郡と帯方郡を指し、帯方郡が成立した3世紀以降の事実とみるのが妥当である。この時点を前後して、韓半島南部で日本産と中国産の威信財が同時に確認される唯一の地域は金海である。また、墓内に多量の鉄器を埋納する時期でもある。3世紀代の国際交易の中心地であり‘国出鉄’記事に登場する主舞台は金海とみなければならないのではないかと考えられる。

IV. おわりに

『三国志魏書東夷伝』の世界の年代は3世紀後半頃であると考えられるが、紀元前2世紀初に該当する古朝鮮準王関連記事やそれよりはるかに以前である燕国秦開の遠征、朝鮮否王の存在など多少時間的な混乱を招いてもいる。実見した内容を記述したものではなく神話的な内容や虚構、誇大な内容も観察される。しかし、中国以外の東アジア地域の文化と風俗、制度などを当代に記録した唯一の史書である。衛満朝鮮の成立と準王の南下、朝鮮相歴谿卿の南下、古朝鮮の滅亡と漢混乱期による流民の南下などは東アジア国際情勢をひっくり返す重要な事件で、実際にある程度事実を記録したものである。一連の事件は韓半島南部社会に影響を与え、物質文化の変動を招くようになり、歴史的に重要な分水嶺となった。先進文物を早く受容した三韓臣智や外来移住民集団は成長する勢いが際立ったのである。三韓臣智たちは戦争・連合・同盟・吸収・消滅過程を持続的に経て、その過程で狗邪国・斯盧国・伯濟国は三国の盟主として成長するようになったのである。

(翻訳:古澤 義久)

※参考文献・図・表は原文をご参照ください。

¹⁹ 『三国志魏書東夷傳』 弁辰條, “國出鐵, 韓・濊・倭皆從取之, 諸市買皆用鐵, 如中國用錢, 又以供給二郡”

²⁰ 武末純一, 2012, 「原三國時代 年代論の諸問題 - 北部九州の資料を中心に -」, 『原三國・三國時代 歴年代論』, 学研文化社

壱岐における交流の実態

—魏志倭人伝に記された一支国の世界—

壱岐市教育委員会 松見 裕二

【一支国を構成する3つの集落遺跡】

《原の辻遺跡の概要》

原の辻遺跡は、長崎県で2番目に広い平野である「深江田原」にあり、島内各地の山麓から湧き出した水が集まり、島内最長を誇る幡鉾川に合流する場所に位置する。遺跡からは海を望むことができないが、幡鉾川を東に約1キロメートル下流に向かうと「内海湾」に行き着く。

原の辻遺跡は、今から約2150年前の弥生時代前期の終わり頃に集落が形成され、約1650年前の古墳時代前期の初め頃までの約500年もの間、日本本土と朝鮮半島との交流拠点として重要な役割を果たした遺跡である。

弥生時代の壱岐島は、中国大陸や朝鮮半島から多くの渡来人が来島し、人と共に最先端の文物や文化が持ち込まれ、取引される“弥生のデパート”として、だれもが憧れる場所であった。

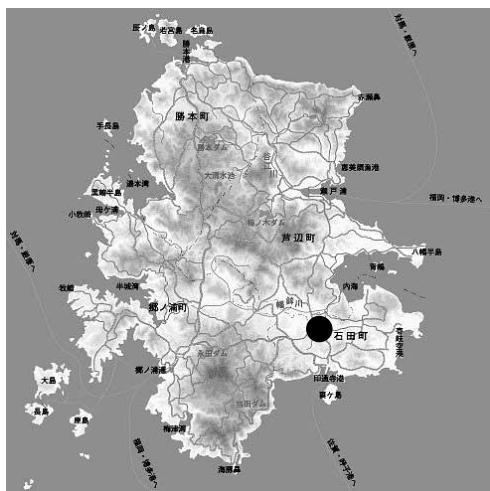


図1. 原の辻遺跡位置図



図2. 幡鉾川河口（内海湾）

《カラカミ遺跡の概要》

カラカミ遺跡は、島の北西部の標高80メートル前後に位置する小高い丘陵上にあり、標高10メートル前後の平野部に形成された原の辻遺跡や車出遺跡群とは異なり、微高地に集落が形成されているのが特徴である。遺跡の麓を流れる刈田院川を西に約2キロメートル下流に向かう「片苗湾」に行き着く。

カラカミ遺跡は、丘陵最頂部にある香良加美神社を中心に居住域が広がり、鍛冶行為を得意とする工人集団が集落内に存在していたことが発掘調査によって判明している。

中国大陸や朝鮮半島から様々な鉄製品や鉄素材を入手し、国内各地に鉄製品を供給する中継基地としての役割だけでなく、弥生時代を代表する鉄製品加工の鍛冶工房を構え、東アジア諸国との交易において重要な役割を果たした遺跡である。

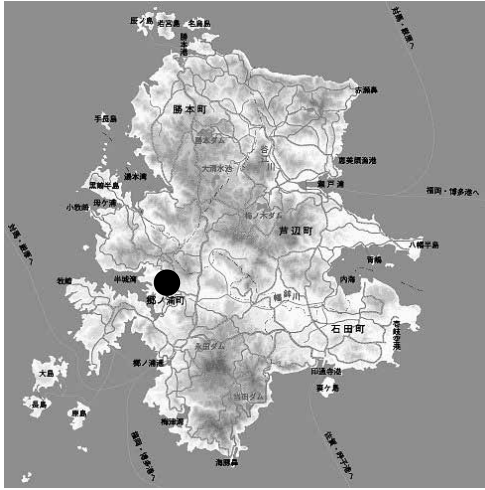


図3. カラカミ遺跡位置図



図4. 刈田院川河口 (片苗湾)

《車出遺跡群の概要》

車出遺跡群は、原の辻遺跡を流れる幡鉾川を上流に向かうこと西に約5キロメートルの場所に位置する。遺跡は盆地状に囲まれた標高10から20メートル前後の小規模な平野一帯に広がっており、遺跡から西に約1.5キロメートル向かうと「半城湾」に行き着く。

車出遺跡群は、小規模な平野を中心に各丘陵の裾部に居住域が点在し、広範囲に集落が分布しており、クド石の製作を得意とする石工集団が集落内に存在していたことがこれまでの発掘調査で判明している。

車出遺跡群は一支国を形成する原の辻遺跡、カラカミ遺跡に続く第3の弥生集落として栄え、東アジア諸国との交流において重要な役割を果たした遺跡である。

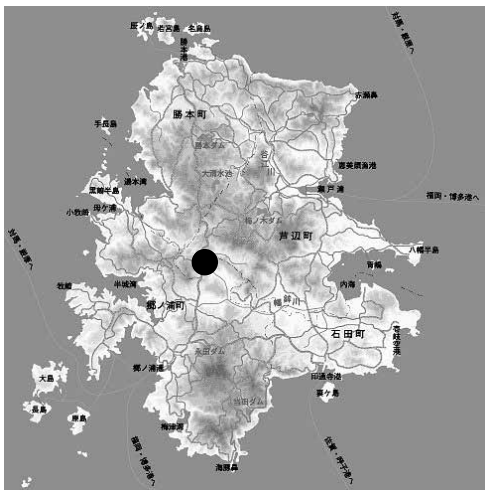


図5. 車出遺跡群位置図



図6. 半城湾

【交流を物語る遺構①】

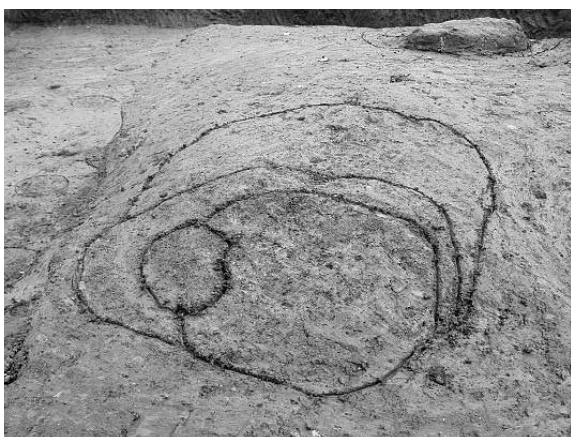


図 7. 1号地上式周提付炉跡



図 8. 2号地上式周提付炉跡



図 9. 3号地上式周提付炉跡



図 10. カラカミ遺跡出土鍛冶関連遺構と鍛冶関連資料

【交流を物語る遺構②】

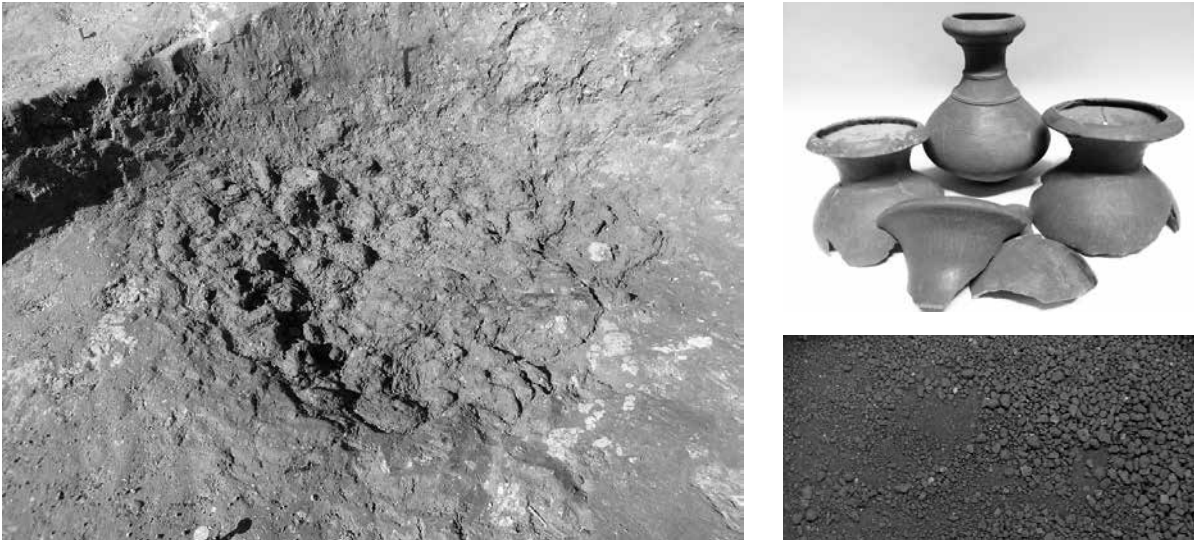


図 11. カラカミ遺跡検出ベンガラ焼成炉跡

【魏志倭人伝に記された一支国の世界】

《はじめに》

弥生時代後期の社会において“楽浪郡→一支国（原の辻遺跡）→伊都国→邪馬台国（女王国）”ラインが確立し、国内において「楽浪交易ネットワーク」が強固となる中、他のクニグニは別ルートによる「交易ネットワーク」を構築せざる得ない状況下にあったものと思われる。

《3つの集落の関係性》

一支国は、原の辻遺跡を中心に車出遺跡群やカラカミ遺跡などで構成された連合体で成り立っているが、立地的環境を比較すると原の辻遺跡と車出遺跡群は平地部に集落が形成されているのに対し、カラカミ遺跡は丘陵部に形成されている点や生活スタイルを比較すると原の辻遺跡と車出遺跡群は農耕を主体とするのに対し、カラカミ遺跡は漁撈を主体としている点などに違いがみられる。出土した遺物に関しても器種や形状において、原の辻遺跡と車出遺跡群では共通点が多くみられるが、カラカミ遺跡はどちらも共通しない独自の形状の弥生土器が多くみられる。現段階では車出遺跡群は原の辻遺跡への依存率が高く、カラカミ遺跡はある一定の距離感をもってお互いに連携関係を保ちながらも独自の集落運営によって成り立っていたことが想定できる。

《カラカミ遺跡の集落の様相》

カラカミ遺跡の出土遺物を見ると海人集団が中心となり集落を構成した可能性が高いが、使用していた漁撈具や収穫物に貝類が多いことから浅海中心の漁撈が主体で深海における漁撈は積極的に行っていた様相がみられないことから必ずしも漁撈のみに特化した集団ではなかったことがわかる。また、弥生時代において国内で導入例がない地上式周堤付炉を採用して鉄製品の2次加工を行っていることや瓦質土器、朝鮮系無文土器といった搬入土器の出土量が多いことから渡来人が集落形成に大きな影響を与えたことが推考できる。カラカミ遺跡は海人集団と渡来系集団が中心となり集落を形成し、鉄製品加工という高度な技術を磨くことで原の辻遺跡とは異なるもう一つの交易拠点に成り得たのではないかとみている。また、搬入土器の中で楽浪系瓦質土器の出土割合が高いことをみても原の辻→楽

浪郡のルートとは別にカラカミ遺跡→楽浪郡ルートが確立していたことが窺える。もう一つの「楽浪交易ネットワーク」が開設されたことで、伊都国以外の北部九州のクニグニは積極的にカラカミ遺跡と交流チャンネルを結んで交易を行ったものと思われる。カラカミ遺跡で集落が形成される弥生時代中期中葉以降において口縁部の先端を跳ね上げる特徴を持つ遠賀川以東系の甕の出土量が突出している現状をみると奴国や遠賀川以東の有力者がカラカミ遺跡の交流チャンネル先の候補相手国となる。

《カラカミ遺跡の交流ネットワーク》

カラカミ遺跡における交流チャンネル先の候補の1つである奴国は、弥生時代中期段階からクニとしての頭角を現し、弥生時代後期において「漢委奴国王」の称号が示すとおり、後漢に認められた倭国を代表するクニである。『魏志』倭人伝にも奴国に関する情報として「正官・兕馬觚、副官・卑奴母離、二万户の家がある」と書き記されている。また、奴国は弥生テクノポリスと呼ばれる青銅製品の生産拠点として栄え、銅矛をはじめ、銅戈や銅剣など武器形祭器を数多く製作している。銅矛の分布をみると本土では福岡平野、国東半島、瀬戸内海沿岸の四国西部に集中してみられるが、対馬島で最も多い本数の銅矛が確認されているのが特徴である。壱岐島と対馬島で比較すると壱岐島で3本に対し、対馬島では100本以上発見されておりその差は歴然である。壱岐島では島の最北端の位置する天ヶ原セジョウ神遺跡で3本の銅矛が並べられた状態で埋納されている事例が確認されているが、対馬島では黒島遺跡や増田山遺跡で銅矛が並べられて埋納されている事例とは別に塔の首遺跡、クビル遺跡、ハロウ遺跡などの遺跡では石棺墓の墓坑内に銅矛が副葬品として納められている事例もみられる。銅矛の分布状況から、奴国にとって一支国（カラカミ遺跡）は目的地までの通過点であり、交流チャンネルの最終相手先は対馬国だったことを意味しているのかもしれない。一支国・原の辻遺跡と伊都国が連携を深め、楽浪郡との覇権が激化する中で、奴国が対馬国と連携し、中国大陸や朝鮮半島から持ち込まれる搬入品をいち早く入手しようとするのは自然の流れと云えよう。奴国が対馬国に対し、製作した銅矛を用い、様々な搬入品を手に入れていたとするならば、対馬島の有力者は奴国との連携の証として銅矛を所有し、最終的に副葬品として棺の中に納められたとも考えることができる。奴国は対馬国と連携し、何を手に入れようとしていたという点では、おそらく青銅製品の素材となる原材料を求めていたのではないだろうかと推考できる。国内随一の青銅製品生産拠点を有する奴国でも、そこにいくら技術力があっても原材料は現地では調達できず、中国大陸や朝鮮半島からもたらされる原材料に頼らざるを得ないのが当時の現実である。定期的にかつ安定的に原材料を入手するためには独自の交易ネットワークを確立する必要があったものと思われる。

一支国内でも原の辻遺跡で発見される鉄製品や青銅製品は完成形もしくは完成形に近い状態のものばかりであるが、カラカミ遺跡で発見される鉄製品は棒状や板状の鉄素材や未完成の鉄鏃などが多く、完成品が少ないのが特徴である。原の辻遺跡では小規模の鍛冶炉は検出されているが金属製品を加工するような工房の存在は確認されていないことから金属製品を入手した時点でほぼ完成形に近い状態だったと想定されるが、カラカミ遺跡では様々な鉄素材を積極的に入手し、地上式周堤付炉を用いて2次加工を施していた当時の様相がみえてくる。カラカミ遺跡は集落の特徴から、金属製品を生産するために必要な原材料を入手することを交易の目的とする奴国の考え方に近く、同じ目的を共有するクニ同士で連携していた可能性は大いに考えられる。

《まとめ》

完成品や珍品を求めていた伊都国系の集団は原の辻遺跡とネットワークを構築し、金属製品の原材料を求めていた奴国系の集団はカラカミ遺跡とネットワークを構築することでそれぞれの目的に合った一支国内の拠点集落と連携していた構図がみえてくる。

【邪馬台国の衰退とヤマト政権の台頭】

《変化する東アジア情勢》

4世紀前半は東アジア社会情勢においても大きな画期がみられる。311年に高句麗が遼東半島へ進攻し、遼東郡を支配することで楽浪郡と帯方郡を朝鮮半島で孤立させ、313年に楽浪郡、翌年の314年に帯方郡を次々と滅ぼしていく。魏・呉・蜀の三国が滅び、280年に西晋が統一を果たすがその西晋も316年に滅び、318年に東晋へと引き継がれる。

朝鮮半島における高句麗の台頭によって、伊都国をはじめとした邪馬台国にとって最大の交渉相手先だった楽浪郡が滅んだことで、弥生時代後期に構築された「楽浪交易ネットワーク」を失うこととなる。また、国内において絶大な力を誇った邪馬台国も衰退し、新たにヤマト政権が誕生したことで“クニ”レベルから“国家”レベルでの対外交流へと進化を遂げ、新たな「伽倻交易ネットワーク」が確立し、倭国の朝鮮半島における躍進へと続いていく。弥生時代において交易の拠点として栄えた一支国は、ヤマト政権が構築した新たなネットワークグループから外れたことでクニとしての存続意義が失われていったものと思われる。

九州本土への拠点移行の背景として、造船技術や航海技術が格段に向上したことによって朝鮮半島と日本本土との間の海の路が“朝鮮半島→対馬→福岡(博多)”へ後に朝鮮半島→対馬→宗像(沖ノ島)へと変更され、物の流れだけでなく人の流れも大きく変わったことが想定される。

《一支国の終焉》

一支国が交易の拠点から完全に交易の中継点に移行したことで一支国に滞在していた多くの人々が新たな交易拠点へと活動の場を求めて島外に移住していったことが一支国の人口減少の要因と考えられる。島内の人の動きは原の辻遺跡の集落解体と連動しており、車出遺跡群やカラカミ遺跡もこの時期に集落が解体され終焉を迎えることから、原の辻遺跡だけでなく一支国全体の動きと捉えることができる。

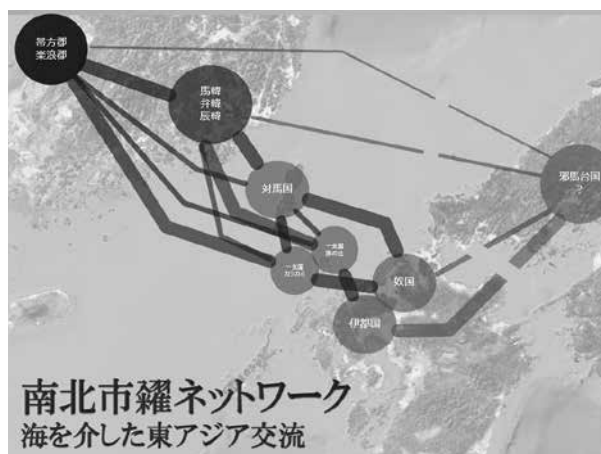


図 12. 南北交易ネットワーク概略

講師プロフィール



にし たに ただし
西 谷 正

九州大学名誉教授・海の道むなかた館長

1938年大阪府高槻市生まれ。京都大学大学院文学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所研究員、福岡県教育委員会、九州大学文学部教授を経て、現在、海の道むなかた館長、九州大学名誉教授を務める。著書に『古代日本と朝鮮半島の交流史』（同成社、2013年）『地域の考古学—私の考古学講義』（梓書院、2018年）等がある。



なか むら しゅん すけ
中 村 俊 介

朝日新聞大阪本社編集委員

1965年熊本市生まれ。早稲田大学教育学部地理歴史専修（東洋史）卒業。朝日新聞西部本社学芸部、東京本社文化部を経て現在、大阪本社編集委員。歴史・考古学、文化財、世界遺産などを担当。著書に『古代学最前線』（海鳥社、1998年）、『文化財報道と新聞記者』（吉川弘文館、2004年）、『世界遺産が消えてゆく』（千倉書房、2014年）、『遺跡でたどる邪馬台国論争』（同成社、2016年）、近著に『世界遺産 理想と現実のはざままで』（岩波新書、2019年）がある。



アン ヘイ ソン
安 海 成

釜山博物館 学芸研究士

1981年韓国・釜山市生まれ。東義大学校大学院史学科碩士（修士）課程修了。専門は三韓時代の鉄器。著作に『板状鉄斧の変遷と社会的性格』（東義大学校碩士学位論文、韓国語、2010年）、「板状鉄斧副葬と葬送儀礼」『埴端林孝澤博士古稀記念論叢』（韓国語、2014年）、「板状鉄斧鉄素材説再考」『博物館研究論集』21（韓国語、2015年）等がある。



まつ み ゆう じ
松 見 裕 二

壱岐市教育委員会社会教育課文化財班係長

1976年鳥栖市生まれ。別府大学文学部史学科卒業。専門は弥生時代、特に集落形成及び構成変遷。著作に『海の王都・原の辻遺跡と壱岐の至宝』（壱岐市教育委員会、2015年）、『原の辻遺跡の全貌展』（壱岐市立一支国博物館、2013年）等がある。



ふる さわ よし ひさ
古 澤 義 久

長崎県埋蔵文化財センター主任文化財保護主事

1981年京都市生まれ。九州大学文学部卒業。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（文学）。専門は東北アジアの先史文化・中国貨幣。著作に『東北アジア先史文化の変遷と交流』（六一書房、2018年）、『原の辻遺跡総集編Ⅱ』（共編著、長崎県教育委員会、2016年）等がある。

令和元年度 東アジア国際シンポジウム

魏志倭人伝の中の倭と韓

—鳥丸鮮卑東夷伝にみる東アジア交流—

長崎会場

2019（令和元）年 10月 19日（土）

長崎県庁 [行政棟 1階大会議室]

壱岐会場

2019（令和元）年 10月 26日（土）

壱岐市立一支国博物館 [3階多目的ホール]

主催 長崎県埋蔵文化財センター

共催 釜山博物館、長崎歴史文化博物館、壱岐市立一支国博物館

後援 長崎市、壱岐市、長崎市教育委員会、壱岐市教育委員会、魏志倭人伝のクニグニネットワーク参加自治体（福岡県教育委員会、佐賀県、福岡市教育委員会、飯塚市教育委員会、春日市教育委員会、朝倉市教育委員会、糸島市教育委員会、宇美町教育委員会、唐津市教育委員会、神埼市教育委員会、吉野ヶ里町教育委員会、対馬市教育委員会）、長崎新聞社、西日本新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞西部本社、壱岐新聞社、（株）壱岐新報社、NHK長崎放送局、NBC長崎放送、KTNテレビ長崎、NCC長崎文化放送、NIB長崎国際テレビ、壱岐ビジョン株式会社

科学分析トピック

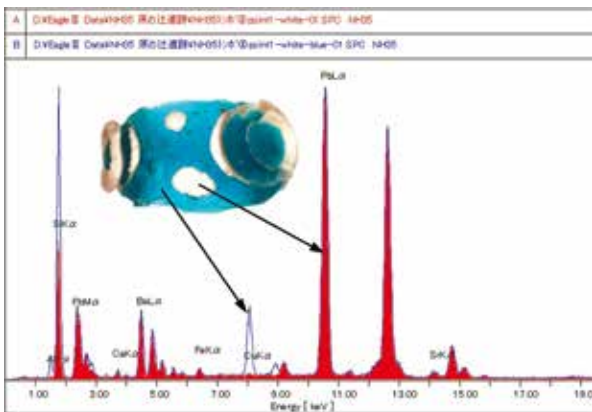
◆原の辻遺跡出土ガラス製品の蛍光 X 線分析◆

原の辻遺跡からは、これまでに 4,000 点以上のガラス製品が出土しています。その内訳は、小玉、大玉、管玉、勾玉、トンボ玉と多岐にわたりますが、そのほとんどはガラス小玉です。古代ガラスは添加物（融材）の種類によって鉛珪酸塩ガラスとアルカリ珪酸塩ガラスとに大別されます。さらに鉛珪酸塩ガラスは①鉛ガラスと②鉛バリウムガラスに、アルカリ珪酸塩ガラスは③カリガラスと④ソーダ石灰ガラスとに分けられます。蛍光 X 線分析法は、資料に X 線を照射することで、資料表面から発生する特性 X 線（＝蛍光 X 線）の強度を調べることで、対象に含まれる元素の種類と含有量を調べることができ、ガラス製品を分析することでその種類を判別することができます。

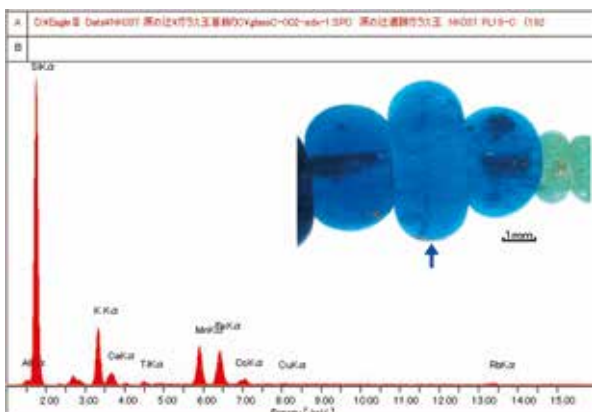
大原墓域の甕棺墓から出土したトンボ玉は青緑色を基調としたガラス玉に白色のガラスで文様を施しています。この青緑色部と白色部を分析した結果、ガラスの主成分であるケイ素のほかに鉛（Pb）とバリウム（Ba）が検出されたことから「②鉛バリウムガラス」であることが分かり、青緑色部のみ銅（Cu）を検出したことから、着色成分が銅であることが分かりました。

紺色のガラス小玉を分析した結果「③カリガラス」であることが分かりました。ガラスの主成分であるケイ素と共にカリウムを多く含んでおり、着色成分としてマンガンや鉄、コバルトを検出しました。

カリガラスと鉛バリウムガラスはいずれも弥生時代に盛行したガラスとして知られています。また当時の中国大陸や朝鮮半島でも同じ種類のガラス製品の出土が知られており、倭と韓・中国大陸とのつながりを示す結果が得られました。



トンボ玉の分析結果⇒鉛バリウムガラス



ガラス小玉(紺色)の分析結果⇒カリガラス

検出した元素の説明

- ケイ素(Si): ガラスの主成分
- 鉛(Pb): 鉛バリウムガラス
- バリウム(Ba): 鉛バリウムガラス
- 銅(Cu): 青緑色の着色成分
- カリウム(K): カリガラス
- マンガン(Mn): 紺色の着色成分
- 鉄(Fe): 紺色の着色成分
- コバルト(Co): 紺色の着色成分